

---

# ファンタシースターポータブル2i~異世界の5人~

サイクロン&ハリケーン

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタジースター・ポータブル2～異世界の5人～

### 【Zコード】

N4736Z

### 【作者名】

サイクロン&amp;ハリケーン

### 【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウイングにルーク・フィレンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。

そして欠片事件から半年後がたつたある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのは先の事であった。

ルーティスにやれたディオは、大きな怪我をし、10日間の間眠り続けた。その間、ディオを見守ってきたのは、他でもない。リト

ルウイングのメンバーだった。そして、ディオはある決断をするのであつた

## プロローグ・謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

## プロローグ・謎の5人

? 「ここは、どこだ?」

? 2 「どうやら成功したみたいだね。」

? 3 「ああ、そのようだな。」

? 4 「失敗するかと思ったが・・・・、何もなくて良かつた。」

? 5 「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

? 2 「でも、彼の腕はたしかだよ?」

? 4 「良い」と言ってくれるじゃないッスか。」

? 5 「そんなことより、本当に大丈夫なのか?」

? 5 「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

? 「ふつふつふ、そうか。」

? 3 「時間もないし、もう行こうぜ。」

? 2 「 そ う だ ね。」

? 5 「 ま で よ、先 々 行 く の は 良 く な い、そ う だ な ま づ は・・・。」

## プロローグ・謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

## 第一話・依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前回は会話だけだった。でも後悔はしてないよう  
なあらうな。  
まあ前回は気にせず御覧ください。

「マイルーム」

こここの部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病氣出もなく怪我したわけではない。彼に取つて久しぶりの休日になる……はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク? いる?」

「(うるさいのが来たな) ああ

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は?」

「別に(言つたら殺される) で、何のようだ?」

「うーん、実はさ。あんたにお願いしたい事があるの」

「なんだ?」

「実はナギサに声をかけただけど、依頼が入つていけなくなつた

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「ビーハー?」

「依頼」

「依頼? ··· 悪いが、今日は俺は休···」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい···」

「ルーク···お願い」

少し考えて、ため息を付き

「わかったよ。付いて行けばいいんだろ?」

と答えるミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言しながらベッドから出でる。

「依頼内容は?」とミコアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者か調べろと。」

「あら、あの通つ

「あらあといはさみがひ。せつかべの木口なに仕事するな」と

「ぶつぶつ言わなこの。せんせー

「せれせれ」ぬかながひ、部屋を出た。

## 第一話・依頼 1（後書き）

やつぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。  
うん、頑張る

## 第一話・依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になつたんじゃないのか？」

そ、そんなことないわ・・・。

## 第一話・依頼2

「パルム草原」

依頼を受けたエミコアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア? ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か?」

「うん。 そうだけど、誰もいないね?」

「だが、油断はするなよ。 いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミコアに注意を促した。

「わかった」 つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいいか、 捜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・」

「――? エミリア! ! 伏せる! ! 」 と叫ぶルーク。

「え?」

「ちつ」とエミコアを無理やり右に押す。

「痛つ」と地面に尻餅をついたエミコアが声を出す。

「へそ、どにからだ」辺りを見渡すルーク。つとそじー。

「あ～あ、外しちゃった。結構自信あつたんだけどなあ～。」つと声がした。

「誰だ……」つと声がした方向に声を出した。

「普通、自分から名乗るものでしょう～？礼儀をしらないの～？」

「なに？」

「いたたたつ」お尻を擦りながら立ち上がるエミコア。

「大丈夫か。エミコア？」

「人を押し倒しといて、その台詞言つかな？まあ大丈夫だけじ。」

「わりい、その方法しかなかつたから。」

「いやいや、その他にも方法があるしょう～？」

などの会話をしていると、

「何？漫才でもやつてるの～～？あんまり面白くないよ～～

「姿を見せないお前に言われたくない。つていうか漫才なんてしていいない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どじ見て喋つてゐの～、後ろだよ～。君の後ろ～」

「「……!?」」と振り向く2人。

「こいつからそこそこ?」つと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたたくない』って辺りかなあ~~?」

「ううう、何かしゃべり方が腹が立つ。」つとエミリアが言つ。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ~~。どう?  
余計に腹が立つたでしょ~~?」

「それより、どうやって後ろに?」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかつたみたいだね~~、まあ、いいや。それより  
答えないとね~~、君の質問に?。簡単だよ~~。僕ちんの特殊能力だ  
よ~~。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言つても、ピンと来ないとと思うよ~~。まあ、さ~らに  
簡単に言つとね~~、・・・・・僕は普通の人間じゃあないんだよ。」

言い方が少し悲しそうに話す。

「えつ?」

「でも・・・・・、どうでもいいことだよねえ~。おつと忘れるところだつたよ~~。」つと、何かを思い出したかのよう、背筋を伸ばして喋る・・・・・が。

「実はさー、君達にお願いがあるんだ」 全く礼儀のない言い方でルークに言つ。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」 つと、そつ答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ? しかも、礼儀がまったくないし」

Hミリアもそつ答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう? 助けてよ。子供だよ? 僕ちん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。つていうか自分からいうか?『子供だよ?』つて、つと言ひながら、シップウジンライを構える。

「子供だから、子供つて言つただけだよ。それよりなに? 子供に武器使うの? 大人げないなよ? ま、武器使つても君は勝てないけどね~」

つと言ひながらゼロセイバーを構える。

「Hミリアーー! 下がつてろーー!」

「ルーク、あたしも戦つよ」

「パートナーの話の事聞くもんだよ～。って君が戦つても足手まといになると思ひよ～。」

つと笑いながら囁く。

「うひさい、あんたに聞いて・・・」

「Hミリア。下がってる・・・大丈夫、そう簡単にやられないさ。

」つと真剣な顔でエミリアに囁く。Hミリアも観念したのか、

「わかった。」つと、答えた。

「せひと、準備はいいか?」つと子供に囁く。

「僕ちんは、いつでもいいよ～。あ、そりゃ、僕ちんの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャーダン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

## 第一話・依頼2（後書き）

とつあえず、一ひとまで。

ルーク「やつぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

## 第一話・依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

## 第一話・依頼 3

「ふつ、遅いな」つといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がね～」つと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「！――！」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にされた。そして、そのすぐれた所から血が出てきた。

「ルーク！！」つと叫んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がつてろつていただろ！――」つとルークが叫ぶ。

「あんな奴、一人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ！――」

「あははは、仲間割れしてる～～」つと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク！！」

「……。分かったよ、だが、無理だけするな

「あんたも、無理はしないでよ

「ああ、分かった」

「あちやー、2対1になっちゃったー。でもねー、僕ちゃんはねー、2対1でも勝てるんだよねー。」ゼロセイバーを回しながら囁く。

「その自信、いつまで続くと思つたよ

「パートナーに『トガつて』つといった奴がそのセリフって……・あははは、変なの〜。」

「お蝶りは、ここまでだ」とミケに向付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラーリタ・ヴィサス?を持つHミリア。

「別になめてないけどなー、」つとまだ嘲笑つてゐるのか、ゼロセイバーを回してゐる。

「その言い方とその態度が腹が立つつての。」Hミリアが言つ。

「あつ、そりなんだー、だつたらねえー」つとゼロセイバーを回すのをやめ、

皿をつぶぬけ。そして・・・・ゆつづを開け・・・

「・・・・、普通に喋ればいいんだね」つと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして・・・・。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらうよ。もつ手加減なしだみーー本氣でいくからねーー」つと言った瞬間体が光始めた。

「「.....」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばつ、バカな」つと驚くルーク

「嘘でしょー! ? 何でヒューマンがナノブラストができるのよーー。つと叫ぶミリア。

(言ふに忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言つたはずだよ、僕は普通の人間じゃないって、あと一つ言つとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらしてあげるよ。君達が死ぬことで。」つとルークに飛び掛かりあつという間

にルークの目の前に来ていた。

「！？（速い）！」「と思つたルークだが、  
ドン！－！

腹に蹴りを入れられ、吹つ飛ぶルーク。

「グツ！－！」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいつきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐ、ぐはあッ！－！」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク！－！」と近寄るが、

「・・・・・終わりだ、ルーク・・・・・」と言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

・・・・。

「言つたろ？お喋りは終わりだつて。」とニヤリと笑つたルーク。

「ぱつ！－！」つどびっくりしたミケ。その訳は・・・・・ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。

「バカな、なぜ攻撃を防げられたんだ。君は完全に万事休すだつたはず！」 つと焦るミケ。

「俺がいつ万事休すに追い詰められたつと言つた？」 つとそれを答え  
るルーク。

「まあ、お前の攻撃を耐えられたのは亞空間事件を乗り越えたおかげかな。いやー、結構、力が付いたもんな」 つと今度はルーク  
がミケ言い方だつた言い方でミケを嘲笑う。

「ふざけ・・・ん？ 亞空間事件？ ああ、やっぱりそうか。君、亞  
空間事件を解決し、グラールを救つた英雄、ルーク・フィレンか。」

「（）名答。まつ、英雄は余計だかな。」

つと答えるルーク。

「しかし、例え英雄でも、あの攻撃を食らつたら誰だつて・・・」

「悪いが、あんな攻撃、何回も食らつたらからね。まつ、慣れちゃ  
つたつてやつ？」 つとまた嘲笑うルーク

「くそ、なめがつて。どうせ急所を外したにちがいない」 つと言つ  
たミケだが・・・

「ふつ、どうやら、俺たちの勝ちみたいだな。」 つと言つルーク。

「えつ？」 つと呆氣ない言葉で言つミケ。そして、

「...」

何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹つ飛ぶミケ。それはエミリアが放つたミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だつた。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立つており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付かれた。

バツキィイイイ～～ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かつたせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう～～。・・・・（・・・・終わったかのか？）」つと警戒をルークは息を吐く。

「ルーク！！大丈夫？」

「ああ、何とか。しかし、エミリア？なぜブラストがたまつてたんだ？」

「ああ、それ？実はバスケットからもらつたのを食べただ～。これだよ。」

「ん？そのクッキーみたいなやつ？」

「そうだよ、これ美味しいんだよ～。」

「まあ戦闘中に食べるはどうかしてると、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」つと笑うエミリア。

「ふふふ」つとひられて笑うルーク。

「あつ、それよりルーク？あいつどうする？」つとルークに聞く。

「そのままにしておけば、あれだしな。とりあえず連れて帰るか。」

「えつ？」つとエミリアが言つた時、

「くつひ

「「「……」」

「ま・・・ま・だ・・・・ま・だ・だ・・・・僕は・・・・ま・だ・・・・負  
け・・・・て・ない・」かなりフラフラなりながら立つミケ。あまり  
力が無いのかナノブラストの状態ではない。

「「「……」」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」つとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかなー」つとエミリア

「ああ、ここ「つとエミリア」がだったが、その時。

? 「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

? 2 「あの野郎、またやりやがったな。」

「 「...」」

その声に驚いたルークとエミリアは、声がしたほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18~19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15~16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって來た。

## 第一話・依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒つ

ルーク「ミラージュブラスト！…！」

ぎや～～～～。

ヒミコア「誤字、脱字があつたら教えてね」

そ・・・・・それ・・・・・俺の・・・・セリフ・・・・

## 第一話・依頼4（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

つと書つておきながら、少し訂正しました。

ルーク「また、訂正するんじゃないか？」

そ、そんな事はない、・・・うん。

ルーク「はあ～～」

## 第一話・依頼4

18～19歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

? 「すいません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

? 2 「兄貴、ミケのあの姿とこの2人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

15～16歳ぐらいのヒューマンの少年が言つ。

「あ、あの～、あなたたちは？」 つとエミリアが2人に訪ねる。

? 「ああ、申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、ディオン。ディオン・バーデン」

? 2 「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

つと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は……」

つとルークが自己紹介しようとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよね？」

「「え?」」「と驚くルークとHニア。

「ど、どして、あたし達の名前を?」

「何故つて、お前達よく雑誌などに載つてじやあねえかよ」

「雑誌に載つてゐただけで、実際パツと見ただけで、分かるものか?」  
つと聞くルーク。

「……分かったよ、正直に云つよ。」「ヒーティオング云つ。

「いいのか? 兄貴?」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前にミケのことで謝らないと」ヒーティオング。

「まつたく、アイツのせいで、仕事もやりこへくなるだらけだ。  
ソンロが右手を頭に当たて、ため息をつく。

「ミケ、じつに」「ヒンロが叫ぶ。

「……。」ムスッとするミケ。しかし、

「僕の頼みでも……かい?」「ヒーティオングがいつ。

「ツー! (顔は笑つてゐるが、なんだ、この威圧感は)」「ヒル  
ークは感じた。

ミケはしづしづ頷き、ゆっくりトイオンに近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」と言ったエミリアだったが、

「力が残っていないから、使えない」つと苛立ちながら叫びつ。

「ミケ……さつさとこの二人に謝れ」つとミケ言いつロ。

「…………」めんつとミケが心がこもってない謝り方をする。

すると、

ドカッ！！

ディオングミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちやんと謝りな？ミケ。」つとディオング言つ。

「痛い痛い、ディオングさん、痛いよ。」つと痛がるミケ。

「謝りなさい」と、言つてゐるんだよ。」つわらに押し付けるディオング。

「うわーーー、痛そり。」つとエミリアが言つた。

「わ、分かった。」「ごめんなさい……」つとミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」つと言いながら、ディオンが押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか?」つと疑問がるソロ。

「わうだね、どうしたらいいかな?」つとティオン。

「えへへへ、僕、謝った意味なくない?」つとミケ。

「……もう一度、謝るかい?」つと笑顔でミケに睨む。

「いやいや、もうこことよ

「はあ～～、どうする? ルーク?」つとH//コアがルークに囁く。

「まあ、俺たちも戦つて、ミケに傷付けたしな。」  
つとルークが答える。

「そうだ、君たちも謝……痛ッ!」またティオンに頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」つとティオンがミケの頭をさつきより強く押しながら囁く。

「いみんなさい!…」  
「ヒルケ。

「はあ～～、」また右手を頭に当て、ため息をつく。ロン。

「一ついいか?」つとルークがティオンに質問をする。

「はい、何でしょうか?」つと威圧感のない笑顔で答えるティオン。

「お前たちは・・・・」つと質問をしようとしたら、突然、

ペペペペッペペペ、

つとHミコアの通信がなった。

「誰からだ?」つとHミコアに言づルーク。

「ええっと、お父さんからだ」つと通信に出る。

『おい、Hミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まつた。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だつたらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあつた。

つていう事だから、帰つて来てもいいぞ。』

つと通信を切るクラウチ。

「つていうか、依頼を受けてたの忘れてたな。」つと右手を頭に当てるルーク。

「いろいろあつたもんね。さすがにもう疲れたよ」つとHミリアが答える。

「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」つとルークも言つ。

「せういえば、質問があるつて言つたね?」 つとディイオンがルーグに言つた。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。田を改めないか? それにミケの説教しないと、つとソロが言つ。」

「えつーーまたーー説教? 勘弁してよ。」 つと豆がミケ。

「うーん、僕はその意見に賛成だけど……、君たちは?」

「もうだな、とつあえず今日ま帰らつか? ハハコア?」

「いいの? ルーク? まだ会つて時間も経つてないのに信じていいの?」 つと豆がミケ。

「とつあえず、田を改めて話す」とつと答えるルーク。

「じゃ、この店で話すから……。」 つとルークに店の名前が書いたパンフレットを渡す。そして、クイックと首でパンフレットを手に取った。

「……分かった、じゃこの店で、」 つと何かに気がついたルークは、パンフレットをしまいながら、言ふルーク。

「じゃ、3日後」「とディイオンが言つ。そして、ディイオンが

「あとと、ミケ、ソロ行こうか。」 つと何やらボタンをこじつ

てる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」つとディオンが右手をあげながら船に乗り、その後にソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオン達の乗った船は立ち去つて行つた。

「H//リア、俺たちも帰るか。」つとH//コアにいい、

「そうだね、帰ろつか。」つとH//コアが船を呼ぶ。ディオン達の船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さあ、帰ろつか?」「つとH//コアが言つ。

「そうだな」つと船に乗ろうとしたが、

「???」つと不意にルークが振り返る。

「……」辺りを警戒してゐるのか、辺りを見渡していく。「何やつてるの~、置いていくよ~。」

「気のせいいか?」つと警戒していたルークだが、H//リアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、H//リア達の乗った船が飛び立つて行つた。  
・・・・ガサツ!!

? 「危ねえ、危ねえ、アイツ警戒してたよ」

? 2 「あの人、なかなかの腕前だつたね。凄い戦いだつたね。それもある子供も」

? 3 「ま、俺たちの相手じゃないだろう。まだあの腕じゃ」

? 5 「でも、あいつと戦いたい。つていうか今直ぐにでも」

? 「みせ、みせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

? 3 「そうだな」

? 4 「はあつはあつはあ、やつと見つけたツスよ。置いくなんてひ  
ビニッスよ」

? 「わりいな、さてと、行くか」

? 2 「そりですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

## 第一話・依頼4（後書き）

まあ一つとして、Hミコト達の船を呼ぶよつとしたのは、ミケが船を壊してしまったので呼ぶよつしました。

正直に書ひとい、どうせいつぱるムニツセ船せざりしたのへつと書いてて思つたのやれのやうな形になつました。

## 1 1 依頼報告（前書き）

第一話では、『じれこません。第一話が始まる前ですでの、1 1にしました。

最初の1 は、第一話、みたいな、ものです。

では、どうい。

### 「リトルウイニング」

リトルウイニングにしたルークとエミリア。 そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」 つとエミリアがルークの怪我の心配をする。

「ああ、何とかな。」 つと答える、ルークだが・・・・

「そんなこと言つけどさ、あの時の傷が大きくなつたら・・・・」  
つと言つ。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。単なる、かすり傷だろ？」 つとルークは、言つが。

「あれが、かすり傷つて言えたもんね。鍼を縫つほどの、怪我だつたのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウチに依頼の報告しないと。まあ、不審人物の5人はガーディアンズ達が捕まえたがな」と言つるークにたいして。

「あの3人の事、話すの？」 つと言つエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなわけあるからな。」  
つとルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会つたって、聞かれたりびつするの？」つとエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見したら、崖から落ちたとでも、言えばいいだろ。」  
つとルーク言つ。

「・・・絶対信用しないと思ひ。」つとエミリアが呆れながら言う。

「まあ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行こう。」つとルークがエミリアに言つ。

「（スッゴい、心配なんんですけど）」つと、口では言わず、心の中で思いながらルークについていくエミリア。

（リトルウイニング事務所）  
プシュ、

つとドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、クラウチがいた。

「クラウチ。今帰つたぞ」つとルーク。

「おう、帰ったか……。つてか、おめえ、ビラしたんだよ? その怪我は?」つと聞いてるクラウチ。

「これか? 油断していたら、原生生物に攻撃された。」つとルークが答える。

「……、そつか。Hミリアは怪我はないのか?」つとHミリコアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、なによ」つとHミリコアが答える。

「んで、何のようだ?」つとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思つたんだよ」つとルークが答える。

そして、更にルークは言つ。

「もう少し、あの辺を捜索した方がいいかもしない」つとルークが答えた。

「えつ?」つとHミリコア。

「なにつ?」つとクラウチ。

「どうこいつ意味だ?」つとクラウチが質問する。

「……、单なる勘だ」つとルークが答えた。

「「？」」「つとクラウチとH//リリアが頭の上に、マークが浮かぶ。

「・・・それより、ルーク。今日、おめえ、休みだつたな？今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」つと行つたクラウチだが。

「なあ、クラウチ？ その休日、3日後にしてくれないか？」つとルークが言う。

「んつ？ 何でだ？」つとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、1日になるかもしれないし」つとルークが答えた。

「？？？、まあ、おめえさん、が3日後にしたいなら別にいいけどよ」つとクラウチは許可をした。

「（やつぱり、行くんだ……）」つとH//リリアが心配そうに、心中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」つとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「なんだ、アイツ、何で怪我をしたんだ？」つとH//リリアに聞くクラウチ。

「えつ？あ、あいつ、こいつ、言ひてたじやん。げ、原生生物に攻撃されたつて」つと焦りながら言ひてHIIコニア。

更にクラウチは、

「あんな嘘、ガキでも言へらあ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですか？って言ひわけねえだろ？だいたい、急に襲われたからと言つて、あんな怪我はしないだろ？アイツならなおさら。」つとクラウチが言つ。

「うううう、」つと更に焦り、言葉を失つHIIコニア。

「……お前のその焦り様から見て、やはり、原生生物に攻撃されたのは嘘だな？」つとHIIコニアに聞く。

もひ、観念したのか、HIIコニアは

「うそ、」

つとHIIコニアは頷いた。

クラウチは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと……話せるか？」つとクラウチはHIIコニアに聞く。HIIコニアは、「クリつと頷き、依頼中に、あつたことを話した。

「なるほど、んで、3日後に会おう、つてことで、休日を3日後に

したんだな?」つと難しい顔する。

「うん・・・」つと、H//リアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まあ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、H//リアは今日はもつ、休んでいいぞ。」つとクラウチが言つ。

「うん、わかった」つとH//コアは答え、H//リアも事務所を出た。  
事務所出ですぐには

「クラウチに、話したんだな?」つと不意に右から声がした。

「つまえつ?」つとH//コアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立つていた。なにやら怒つた顔している。

「クラウチに、話したんだな?つて聞いてるんだ!...」つとれつとより大きな声で言つ。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよ!..。でも、お父さんには聞かれて、仕方がない。そもそも、あなたの嘘が、下手だから、こうなったんじゃないの!...?」つとH//リアも怒鳴る。

「だから何か?それで話してしまつのかよ!..」つとルークが言つ。

ガヤガガヤ

「と回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チヨルシーが出てきた。

「おい、ルーク！！おめえ、いい加減にしろよ！…」  
「おめえが悪いんじゃねえが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめえが悪いんじゃねえのか？」  
「とクラウチがルークに叫ぶ。

「正直に話さない？それだけ、俺が悪いのか？話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」  
「とルークがクラウチを睨む。

「てめえっ」「とクラウチを睨むが、

「ルーク！！あんた、本当にこの加減しなさいよ…」  
「とまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はあ・・・・・、わかつたよ・・・・・」

「とルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入つて行った。

「てめえ、まだ話しさ」  
「とクラウチが言つが、ルークは無視して、  
マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？アイツに酷いこと…・・・」  
「言われたのか？って言

おうとしたクラウチだが、

「・・・・」エミコアは涙を流してた。

「エミリアーー！」つと心配したクラウチ。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷い」と言われたのか？」つとクラウチが焦つて、エミリアに聞く。

「・・・・」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だと分かっていながら、クラウチに嘘を言ったルーク。それなのに、嘘が下手だからっと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしてた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治つてもいいにも、かかわらず。エミリアはそれを気にしていた。

「仕方ねえ、ルークの方は俺が追つ。エミリアはこのまま休め。いいな？」つとクラウチが言うが、

「お父さん、あたしも行く」と言つてエミリア。

「なに？」つとクラウチが聞き返す。

「嫌な予感がするの・・・・」つとエミリア

「嫌な予感だと?ちつ、仕方ねえ。ウルスラ、チエルシー、ちよつくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」つとウルスラとチエルシーに声を掛ける。

「わかつたわ。」つとウルスラ。

「ちゃん、つれで、帰つて来てヨ」つとチルシー。

そしてH//コアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

## 1 1 依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

ルーク

ディオン

ソロ

ミケ

???（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介ですでの、HMLIA達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

## 1 2 悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もつと頑張ります。

では、

- 1
- 2

悲しい決断を「」見てください。

## 1 2 悲しい決断

「パルム大都市・ショッピング街」

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていた。

「はあ～～」

つとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言つたんだ？」

つとリトルウイングで自分が言つた事を後悔していたのであった。

「あんな事を言つて、更に逃げたんだ、帰りにくい」

つとなど独り言を言つてると、後ろから、

「何をブツブツ言つてるの？」つと声がした。

振り返つてみると、そこには、1人の女性だった。

「・・・、なんだ、お前か。」つとルークは女性に言つた。

「なんだ、つとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」つと女性は腕組みをしながら言つた。

「ほんの一年前に会つただろう？」つとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお祖（お爺）  
がある設定）に帰つて来なこのせ、”お兄ちゃん”だけだよ。」つ  
と女性が言つた。

「なんだか言えばわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなつて言つて  
んだる。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんつて言つて何が悪いの？」

「恥ずかしいんだよ……」つと女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガで  
ある。

そしてソラは、

「じやあ、何で呼んでほしけ？お兄ちゃん？兄ちゃん？それとも、”  
イオ兄ちゃん？”

「最後のはやめな」つとルーク。

「……こつまで、血分をかぐるの？」つとソラ。

「……」つと黙るルーク。

「今まで”トイオ”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」「ヒン  
ラ聞く。

「やっぱつ、兄さん。、リトルウイングを辞めるつもつなの？」つ

ソラが聞く。

「ああ、やうだ。いや、そのつもつだったんだが……。」

「とまた黙つてしまふルーク。

「辞めるに辞められなくなってしまった。」と続きを語るソラ。

「ああ、やうだよ。今、思つとなぜ偽名を使つたんだか……。」  
「と後悔するルーク。

「じゃあ、どうするの?」とソラが聞く。

「この先もルークとして生きるが、それとも、ルークを捨てて、ティオとして生きるか」とソラが語る。

「…………」下を向くルーク。

「お兄ち……、兄さん。」

「…………俺は、」と答えるとしたルークだが、

「ああ、いたいた。ちよつとお姉ちゃん。置いていかないでよ。」  
「と後ろから男の子がやつて来た。そして、

「わへ、酷こよ……って、つわづわ、ティオお兄ちゃん。」と  
驚く男の子。

「よお、リオル。久しづり」と駅の方に向かう。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねえ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」つと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あつ、しまつた。今は『ティオじゃないもんね。ルークだつた。』つとリオルが言つ。

「いや、ディオいい。」つとルーク。

「お兄ちゃん？」つとソラが言つ。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日から『ティオで生きていく』つとルーク。

「いいの？お兄ちゃん」つとソラ。

「ああ、もう決めた。・・・それに・・・もう、あそこ（ロトルウイング）には、帰れないしな。」つとルークが言つ。

「じゃあ、退社するの？」つと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは・・・死んだ事にする。」つとルークが信じられない事を言った。

「「えつ？」」つとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ（ヒミコア）が探すかも知れないし」つと言つルークだが。

「それだけは、絶対にダメ」つとソラ。

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう？もしもルークが死んだ事にしたら、一番悲しむのは、ヒミコアさんよ」つとソラが少し怒りがこもつた言い方をする。

「・・・」何も言えなくなる、ルーク。

「例え、ルークが死んだとしても、ヒミコアさんは信じないわ。必ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」つとソラが続ける。

だが、ルークは・・・

「あいつを使えば・・・ヒミコアも諦める。」

「まさかっ！」つとソラが声をあげる。

「せう、あいつを使つ」つとソラが一度言つルーク。

「そんな事をしたら、カイン兄さんが・・・それに、何よりお父さん達が許さない。」つとソラが怒る。

「カインが言つていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助からなかつたら、俺の体を利用しても構わない、つと。何せあいつは俺の血で生きて、そして死んだ。」つと元氣なく言つルーク。

「カイン兄さんの奇病の件ね」 つとソラが元気なく言つ。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として……。確かに言つてた。俺が死んだら体を利用しててもいいって」うつ向きながら言つリオル。

「でも、お父さん達が……」 つとソラだが。

「……もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない……」 つとルークは元気なく言つ。

「…………」 ハミリアさんは……どうするの? つとソラが聞く。  
「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくともやつていける」 つと答えるルーク。

「…………」 これ以上なにも聞かないソラだった。  
「まずは、髪型を変えないと。」 つと何処かに行こうとするルークに対してもソラが言つ。

「本当に……良いのね」 つとソラが言つ。

そしてルークが立ち止まりそして、いつも言つ。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと……お兄ちゃんって呼ぶな。」 つと言つて歩き出したディオ。いつも通りに言つたつもりだったが、ソラには分かつてた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。  
そしてディオは呟いた。

「ヒリア……みんな……すまない」と。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらつたものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあつた。そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

『どうも、ルークです』

『……ディオでいいですよ。』

「……？」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか？』

「？？？」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入つてゐるんです』

「なんだつて！？」

『驚くのも、無理がないと思つます。どうでしょ？。会ひに来きました

縮めましょつか?もちろんあなたの都合に合わせますよ。トイオさん。  
『

「明日……」

『???:』

「明日の10時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか?』

「ああ」

『残念ですが、その店、潰れますよ。』

「なにつ…?」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか?』

「わかった。なんという店の名前だ?』

『ラッピーカフェと言つ店です。名前は、あれですが結構人気の店  
なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あつ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市の  
カフェ街の中間辺りです。』

「わかった。』

『それでは、また明日』

「まつてくれ。」

『はい？何でしょうか？』

「そこで詳しく話してもらいうかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「ああ、わかつた」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

次回

第一話：嘘と真実

## 1 2 悲しい決断（後書き）

次回、第一話・嘘と眞実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。

紹介のキャラは

ディオ（ルーク）  
ソラ  
リオル  
ディオン  
ソロ  
ミケ です。

謎の5人は名前が5人登場次第書ききます。 ちょくちょく謎の5人が登場してきます。本格的活動はまだしません。

## オリキヤラ登場人物（前書き）

無駄な所を省いたことにより、ページが極端に少ないです。

ディオン「少ないのは、貴方の発想力がないからでは？」

ソロ「兄貴の名前、ディオン。そして、英雄の名前ティオ。かなり似てるし、発想力のなさがでてる」

ディオンとティオは、全然違うよ。マカロンとまじりんみたいな。

ミケ「M SP からとりました？」

そ、そんなことはない。

ディオン「……（目が泳い出ますね）」

ソロ「短いが、見てくれ」  
あつ、俺のセリフ……。

## オリキヤラ登場人物

ディオ・ルタ・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：22歳

タイプ：ブレイバー

一人称：俺

髪色：金髪

服装：

イロハフブキ白×黒

今作の主人公。旧名がルーク・フィレンで今まで、エミリア達に”ルーク”と呼ばれて、いたが。実はその名前は偽名であり、本名は、ディオ・ルタ・オルテガである。ある事件により、偽名のルークで、暮らしていくが、リトルウイングで偽名を使った事を後悔している。とある、ことでリトルウイングを飛び出したことも後悔している。

無理矢理、髪型を変えたり、服装も変えた。今後はディオとして、生きていく事を決める。

ソラ・ミル・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：19歳

タイプ：フォース

一人称：私

髪色：金髪

服装：カグヤヒラリ

ディオの妹。

頬つぺたの上に赤い模様？みたいなものをつけている。元カーディアンズで、兄ディオが失踪したため、わずか3ヶ月で辞める事になった。再会後は、ディオには言つてないが、ディオンの立ち上げた部隊に入っている。

リオル・ルタ・オルテガ

種族：ニユーマン

タイプ：ハンター

一人称：僕

髪色：茶髪

年齢：18歳

服装：

パニッシュュジャケット

母親の血が多く繋がり、ヒューマンである兄、姉とは違い、ニユーマンとして生まれた。強くなりたかったので、ソラに無理を言ってディオンが立ち上げた部隊に入った。

ディオン・バー・デン

種族：ヒューマン

タイプ：？？？

一人称：僕

年齢：18～19歳？

髪色：銀髪

イルミナス・コート

ルーク（ディオ）とエミリアが依頼中についた青年。當時は笑顔みたいな優しい顔だが、笑顔で、凄い威圧感を出すことも出来る。自分の立ち上げた部隊のリーダー。ディオンにも、偽名の名前があるとかないとか。ある人物を追つてる。

ソロ・レスター

種族：デューマン

タイプ：ハンター

一人称：俺

年齢：15～16歳

髪色：黒髪

服装：

ブレイブスコートシリーズ（黒×暗い青）

ディオンが立ち上げた部隊の副リーダー。ディオの前で、自分の強さを見せてないので、ディオはソロの強さを知らないが、相当のやり手。ミケに対してもかなり厳しい。

ミケ・ラン・ジャータン

種族：ヒューマン

タイプ：ブレイバー

一人称：僕

年齢：10歳

髪色：青髪

服装：

### ジャッジメントコード

ディオ（ルーク）とエミリアを襲つた張本人。ヒューマンでナノブラストを使える。油断したせいか、ディオ達にやられる。そのあと、無理矢理ディオンに誤らせられた。何故、ディオ達を襲つたのか、まだディオに言ってない。

## オリキヤラ登場人物（後書き）

ソロ「なあ、兄貴？これだけで、俺達の事をわかつてもうらえるか？」

ディオン「まあ、自分達がこのような人物だと、今後の話で、わかつてもうえれば、いいと思しますよ。」

ソロ「じゃ、書く必要なかつたんじゃ・・・」

ディオン「あるのとないのでは、違いますからね。」

ソロ「確かにな。んつ？作者がいないな？」

ディオン「彼なら、ディオ君に呼ばれて、出掛けましたよ。」

ソロ「おこおこ、・・・・締めはビリする？」

ミケ「僕がやるよ。誤字、脱字がありましたら、お願ひします。」

## 第一話・嘘と眞実ー（前書き）

第一話です。ほとんじが余話になつてますが、気にしないでください。

「ディオ」「確かに……」の辺のはず……あ、あっちかな

では、どうや

## 第一話・嘘と眞実1

「パルム大都市・カフェ街」

カフェ街に、ディオがいた。ディオンと話をする日になつたのだが、ディオは、キヨロキヨロしている。

「確か・・・・、この辺のハズなんだが・・・・」

「じつやら、ラッピーカフェを探しているらしい。つとそこく、

「もう少し行つた先の黄色い店ですよ」つと後ろから声がした。振り返つてみると、ディオンがいた。じつやら声の主はディオンだつたようだ。

「あつ、ああ、そつか」つとディオは、答えた。

「ん? あんた1人か?」つとディオがディオンに聞く。

「ええ、ソロとミケは、ある調査をしてもらつてます。」

「? ? ? ある調査?」

「詳しい話は、店で話します。さて、行きましょう」つとディオンは、約束の店である、ラッピーカフェに向かつていった。ディオは

その後を付いていく。

～ラッピーカフェ～

ガチャ、

『いらっしゃいませ！…何名様ですか？』 つと定員が答える。

「一一名です。」 つとティオングが答える。

『では、いらっしゃるお席になります』 つと定員がティオ達を席に案内する。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

水とおしぼりを持つてきた定員が、

『注文が決まりましたらお呼びください』 つと定員がティオ達の席を離れる。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「なかなかの店だな。」 つと感想を語りティオ。

「それだけではないよ。味もいいんだ」 つと答えるティオ。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……にしては、少し騒がしいな。」

「あれが、原因だと思つよ」つとディオンが指を指す。その先にはモニターがあつた。モニターには、グラールチャンネル5がやつていた。どうやらニュースの内容で、ガヤガヤしていたらしい。

『リトルウイニングのルーク・フィレン、失踪。今現在、リトルウイニングのメンバーがルークの捜索するも、ルークの居場所、確認出来ず。』つとニュースが流れていった。

「……」

「帰らなくて、いいのかい？」

(少し、会話だけになります)

「ああ、」

「偽装死亡……止めたそつだね。ソラちゃんに聞いたよ」

「ああ、やっぱり、悲しむ人を見たくない」

「あれほど、ルークは死んだ事にするつと黙ってたのに、なんで?」

「…………夢を…………見たんだ……」

「夢?」

「エミリアの夢だ……俺が偽装死亡したことにより、エミアが凄い落ち込むんだ。いや、それだけじゃない。俺は、偽装死亡したことにより、エミリアの笑顔を奪ったんだ。それで、エミリアはもう、笑うことほななかつた」

「だから、偽装死亡は止めたのかい？」

「偽装死亡をするつと言つた自分がバカみたいだ。（ミカニ、エミリアを守つて、つと言われたのにな）」「まあ、いいんじやないかな？そつこうのは、夢に限るよ。」

「ああ、そうだな。」

「それより、何か頼も。何飲む？」

「そうだな、カフエオレにしよう」

「じゃあ、僕はホットコーヒーにしよう」

定員を呼んだディオンは、それぞれ注文するやつを頼み来るまで、例の話をする。

「ディオン、早速話なんだが」

「待つて、つとディオンが話を止める。

「どうした？」

「ディオンじゃ、君と被るから……そうだな……ルークにしてくれる?」

「ふざけるな」

「じめん、じめん。冗談だよ。ディックつよんでくれるかい?」

「ディック?」

「僕のもう一つのなまえだよ。ディック・ハリンソン。僕の偽名の名がこれだよ。」

「なぜ、偽名で呼ぶんだよ……」

「だから言つたでしょ? 被るからだよ。」

そう、話をしてると、注文した物を持ってきた定員に注文した物を渡され、席から離れる定員。

「つで、まず聞きたいのはあるかい? つと言つてディック。  
「あんた達の目的はなんだが」

「目的……か」とコーヒーを飲みディック。

(会話だけになります)

「実は、僕達は妙な動きをしている5人をあつてるんだ

「妙な5人?」

「君たちが、依頼を受けたのはなんだつたかな？」

「怪しい5人の調査。だが、それは元ローグス3人、強盗2人で、それと関係ないぞ？」

「いや、関係あると思つよ。」

「！？」

「依頼を受けた、怪しい5人がその5人じゃなかつたとしたら・・・。？」

「！――！」

「そり、その依頼は、まだ終わつてない」

「ま、まさか」

「しかも、その5人が、僕達の追つている5人の可能性もあると思うんだ。」

「（あの時の、妙な感覚はこれのことか？）」

「まあ、決まつたわけじや無いけど、その可能性が大だね」

「そいつらの名前を知つてるか？」

「いや、今それを調査をしている所なんだ。つてな、訳で、それ以

外なら、話せるよ。」

「なぜ、その5人を追つてるんだ?」

「……このグラールを救うため」

「なに?」

「彼らは、このグラールを支配する可能性のあるだ。」

「なぜ、わかるんだ?調査中なんだろう?」

「彼らに、嫌なオーラを感じたんだ。」

「嫌なオーラを?」

「うん、」

「でも、それだけグラールを支配する奴らって決めつけるなど」

「……確かにね。支配だけで終わればいいけどね」

「どうこう」とだ?」

「彼らを調査中つと言つても、全然わかつてないつて事ではないんだ。」

「じゃ、少しならわかるのか?」

「うん、彼らは一人一人それぞれ違う種族だと言つこと。彼らに嫌なオーラを感じた事ぐらいだね。」

「でも、それだけで、そいつらを患者にするのは……」

ଶର୍ମିଳା

「あつ、ごめんね」

つと、  
デイ才に謝り、  
通信に出るデイツク。

「はい、ディックです」

・・・・ディックって、なんで偽名使ってんだよ兄貴。

通信相手はソロだつた

「ディオ君と似てるからね。だから偽名の方につかってたんだ。」

『オレとミケは分かるが、他の奴らならどうするんだ。ビックリするぞ』

「うめん、うめん、気を付けるよ。つで、わかつたのかい。」

『なあ、そこにディオの兄貴がいると・・・・つていてるみたいだな。なら丁度いい。ディオ兄貴も聞いてくれ』

「どうかしたのかい？」  
つとマイクが聞く。

『あの5人。やはり、兄貴の言つ通り、このグラールを支配するつもりが高い。』

「やっぱり、そうだつたんだね。」

（話の内容は、ディオとティックにしか、わからないようになり、通信の前にイヤホンを付けてます。）

「名前は、わかるか？」  
つとティオが聞く。

『いや、あいつらなかなか仲間の名前を呼ばない。警戒しているのか、「君、お前、お主、」で読んでる。』 つと答えるソロ。

「そうか。ありがと」  
つとティックが言つが・・・

『それともうひとつ』 つと真剣な顔と言い方でいつ（通信機は画面？が写る通信機つでわかるかな？）。

「どうしたんだ？」 つとティオが聞く。

『さつき、奴らの目的は、グラールの支配つて言つたが、どうやらそれはおまけらしい、』 つと言つソロ。  
「何？じゃ、その5人の本当の目的はなんだ。」

『・・・・・兄貴には、5人それぞれ違う種族つてのは聞いたか？』

「ああ、聞いたが、それがど・・・・・」 つと言葉が失つ。

「もしかして……」  
ティックがソロに聞く。

『ああ、間違いない……あいつら種族戦争を起しそつもつだ』  
『なんだって』っと声を上げてしまつティオ。その声に、反応しティオに向く、寄。

『すいません』っと謝り、小さこ声で、ソロに聞く

『ま、間違いないのか?』

『ああ、あいつらそんな話をしていた。……聞き間違いであつて欲しい。』っと悔しそうに答えるソロ。

『それに、あいつらの嫌なオーラの意味もわかつた

『なんだい?』っと聞くティック。

『あいつら……転生を使つてゐる』

『転生だつて?』

つとティックが聞く。

『ああ、間違いない。凄いオーラを感じる。……勝てないオーラを……』

『……わかつた……ありがとう。もつとあげてもいいよ』

『わかつた。これより帰還する』

少し間があく、すでに2人の飲み物は空だ。

「大変な事になつたね」

「ああ」

「・・・・・」

「・・・・・」

「さてと、話の続けよ・・・・・」つと通信前の話をしようとしたが、

「あんた、いいのか！…種族戦争だぞ。そんな事が起きたら、世界がほろびるんだぞ」 つとディックに怒る。

ディックは

「わかつてゐよ」なぜか落ち着いてゐる。

「なぜ、そんな落ち着いていられるんだ。」 つと聞くディオ。

「なぜって、あいつらにはまだ、種族戦争どころか、グラールの支配さえ出来ない。」 つと答える。

「えつ？」

「考えてみなよ。今のグラール。みんな種族差別なく生活してゐるで

しう。まず種族差別をするには、グラールを支配する必要がある。だけど、このグラールには、ガーディアンズ、同盟軍、ローグス、リトルウイング。SEEDを封印した英雄のイーサン・ウェーバー。・・・そして・・・亜空間事件を解決した英雄、ルーク・フレンこと、ディオ・ルタ・オルテガ。君たちの力が統一すれば大丈夫だよ」と答えるディック。

「凄い自信だな？」

「自信じゃない……答えさ。この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ」

「……」つとディックの言葉に言葉が出ないディオ。

「1人で戦うなんて、バカな事を考えない事だね。」

「あいつら、転生してるんだろう?」

「転生してるから、絶対に強くなるとは限らない。転生して、強くなつたつと考へると必ず怪我をする。転生しても、かなり努力しないと、強くは慣れない。それに転生しても、必ず強くなる保証はない。逆に弱くなるかもしれない。……」つと悲しそうに言う。

「？」つと疑問そうにするディオ。

「昔いたんだよ、僕達の部隊に、転生して強くなつたつと言つてい張つて死んだ仲間がね。全くバカなやつだよ。」

「・・・・・」

「グラールを救うためにはまず絆を掴まなければならない。今のグラールの絆よりも大きな絆が。彼らに支配されると、絆は簡単には崩される。そうなる前に・・・」

「そうだな。」

「ところで、H//コアちゃんから通信・・・来ないね。心配してるのは誰なのに」「

「H//リア達の通信は拒否しているからな。」つと答えるティオ。

「そつか、」

「・・・・・」

「まずは・・・・・」

「? ?」

「あなたの話を聞くのが先だつたな?」

「そうだね」と舌真似を呼び。

「? ?」

「H//ヒーのおかわりください」

「あつ、俺も」

『はい、かしこまりました』つと店員がディオ達の席を外した。

「それじゃ、話そつか。僕達の絆を深めるために」

## 第一話・嘘と眞実1（後書き）

「ディオ、『嘘と眞実』があまり関係ないな」

なに、これからですよ。まだ一番田だから。

ディック「それは楽しみですね」

でしょう。君となら話が会うかも

ディオ「はあ～」

ピーピーピーピーピーピー

ディオ「? ?」

通信?

ディック『僕だ』

ピッ

ソロ『誤字、脱字があつたら教えてくれ』

## 第一話・嘘と真実2（前書き）

もつ、ほとんじが会話です。

「ディック」「一ヒーおかわり」

「ディオ」「俺も、」

ちなみに飲み放題です。セルフサービス出はなく、店員が運ぶ珍しい店です。

店員『それでは、嘘と真実2、御覧下さい。』

（リトルウイニング事務所）

「どうだ、見つかったか？・・・わかった。調査を続けてくれ」

ピッ

「はあ～、あの馬鹿、何処に、行きやがった。」 つとクラウチが腹をたてている。そこへ、

「クラウチ、ルークは見つかったの？」 つとウルスラがクラウチに聞く。

「いや、ルークが乗つてた船なら見つかったんだが、肝心の居場所までは、まだだそうだ。」 右手で自分の頭をかくクラウチ。

「チヨルシーは、店に来る客に聞いてるそなうなんだけど、今のところ手応えがないみたい」 つとウルスラも答えた。

「ナギサの方も数分前に、通信があつたんだが、手応えがねえそうだ。」

「そう、何もなければいいけど

「とにかく、・・・ヒーリアの様子はどうだ？」 つとクラウチが

ウルスラに聞く。

「いつもと変わらないわ。」つとウルスラが答えた。

「そうか。ルークがいなくなつて、駄目になるかと思つたがなあ。」

「『今度は、あたしがルークを助ける番』と行つて、探しに行つたわ」

「ホント、変わつたよな。あいつ。」

「彼のおかげよね。あの子が変われたの」

「ああ、やうだな」

「・・・・」

「んつ?・?づした?」

「な、何でもないわ。」

「?・?・?」

・・・・数日前

「ルーク、ちょっといいからじぶ。」

「えつ?あ、はい。なんですか?」

「H//リ亞の事なんだけど

「H//リ亞がどうかしたんですか？」

「別にどうかした分けではないわ。」

「はい？」

「あの子が変わったのは、自分のおかげでだ、って考えたりする？」

「いえ、ただ俺は、H//リ亞の変わることをサポートしただけで、別に俺が変えたわけでは、ないですよ。・・・・なぜそんなことを？」

「前も、H//リ亞について話した事、覚える？」

「同じような、話した気がしますね」

「わづね、じゃその後の話した事、覚える？」

「クラウチの家族の話？」

「その前よ」

「・・・・・、あなたが、ふと彼女の前から消えるんじゃないかなって、話ですか？」

「その通りよ」

「・・・・」

「ルーク？」

「大丈夫ですよ。ヒミコアの前からいなくなつたりしませんよ。」

「それを聞いて安心したわ。・・・・いつまでもヒミリアを守つてあげてね。一人でいるのは、寂しいと思うし、何よりあなたのパートナーでもあるからさ。」

「任せてくれ」

「頼もしいわ」

・・・・現在

「（あの時の話が現実になると、思わなかつたわ。）」

「ウルスラ、大丈夫か？」

「えつ？ええ、大丈夫よ。それより、クラウチ、ヒミリアからの通信はあつたの？」

「いや、まだだ。もう少しだと思つ・・・・」

ループルッシュ

「…………」

「も、もしもしHミリアか?…どうだつ……どうしたHミリア?  
何で泣いてるんだよ?何?ルークを見つけただと?それでなんで泣  
いてるんだ?…………どうこう意味だよ、それ…………」

・・・・数時間前

～ラッピーカフェ～

「なるほど、そういうことだったんだ

「驚くのは、当たり前ですからね」

ティオとティックが雑談をしている。

「ところで、ミケの、『だよね～』ってのは、なんだ?」  
ヒックに聞く。

「ああ、それ?単なる癖だよ。」  
と答えるルーク

「癖?」

「たまに、やるんですよ。相手を馬鹿にした言い方。やめなさい  
と言つても聞かなくて」

「ミケのヒーローマンのナノプラスチは?」

「転生に失敗したんだ。」

「転生に失敗した?」

「僕達の転生機械はヒューマンはヒューマン、ニコーマンはニコーマンの専用の転生機械なんだ」

「つで、間違えて、ビーストで転生したわけだ。」

「そういうこと。まさか、成功するとは思わなかつたよ。今後こんな事がないように壊したよ。あつ、もつ結構時間たつたね。もうこの辺にしようか?」

「2ついいか?」

「なんですか?」

「あんた達の部隊の名前は?」 つとディックの立ち上げ部隊について聞く。

「部隊の名前? そりいえば言つて無かつたね。僕達の立ち上げた部隊の名前は、【一種族】部隊つて言つんだ。」 つと答える。

「えつ? い、一種族部隊? なんだよ、それ?」

「もともと僕達は、一種族だったのは、知つてる? ヒューマンによつて、ニコーマン、キャスト、ビーストが造られ、そして各種族の関係が悪化し戦争が起きた。戦争は終わつても、しばらくの間は、種族差別は続いたと思う。デューマンという新たな種族も誕生した。」

今は種族差別つと言つたものはないけど、もし、種族差別があつたとしたら、種族をなくし、皆が一種族になれば、種族差別もなくななると思うし、戦争も起らなうと思う。そういう意味合いもあって一種族部隊にしたんだ。」つとディックが答えた。

「一種族か……」

「例え一種族になつても差別は続くと思つ。僕達は差別つと言つたものを無くしていきたい。種族差別が起きた場合、グラールが滅び、戦争が始まる」

「・・・・・」

「そつなる前に、彼らを倒さなければ。」

「そつだな。」

「もう一つ聞きたい」とはなんだい?」つとディックが言い、

「あんたも転生してゐるのか?」つとディオが聞く。

「うん、僕の部隊で転生しているのは、僕と、ソロ、ミケの3人だよ」つとディックが答えた。

「わかつた、」

「そつだな、話も終わりにしよう。」

「そつだな。」

「何かあつたら、連絡するよ。連絡先教えるから。」

「あんたからも連絡しろよ」

「わかつてますよ。」

お互いに連絡先を交換する。

「じゃ、失礼します。お金の方は僕が払いますので」

「いいのか?」

「大丈夫ですよ。では、失礼します」つと会計をし、店を出たディック。そして、その後すぐに、ディオも店を出た。

（パルム大都市カフェ街）

ここに1人の少女と1人の少年が歩いていた。何やらぶつぶつ言いながら、歩いている。

「ルーク……どこに行つたの……」

あまり元気のない言葉だった。

「エミリア。大丈夫か?」

つと少年が少女に声をかけた

「えっ？あ、うん、」「めぐね、コート。大丈夫だよ」

H//コアとコート、ビーナスら少女と少年の2人のようだ。

「H//リア、ルークがいなくなつて、元気がないぞ。」 つとコートが言つ。

「だつて、ルークがいなくなつたの・・・」

「H//リアのせいじゃないぞ！..」 つとコートが言つ。

「えつ？」

「クラウチだつて、お前のせいじゃないって言つてるし、ルークだつてそんなことを言つはずない」とコートが言つたのだが

「何で、あんたがルークの思つてることがわかるのよ。」

「匂いでわかる。あいつには、そんなことを言わない匂いが。」

「そんなんでわかるわけないでしょーーー！」 つと怒鳴るH//リア。

「今、気にしてるのは、あたしが、お父さんに戦を言つとけば、こんな事にはならなかつた。それに・・・あんぐらいで怒つて飛び出したルークに怒つてやるんだ。」 つとH//コアは言つた。

「H//リア、お前なんだかルークみたいたぞ？」

「えつ？」

「H//リアがいなくなつた時のルークに少し似てる。」

「でも、ルークみたいに強くなれない。」

「H//リアもすごいぶん強いぞ。」

「ううん、あたしは強くなことよ、お父さん達が心配しない様に、強くみせてるだけ……」つと話していたH//リアだが

「Hの匂い……」

「えつ？」

「Hの匂い……ルークの匂いだ」つと走り出すコート。

「えつ？ちよ、ちよと待つてよコート。」コートを追いかける、H//コア。

「あそこだ。あそこだ」H//コア

「はあ、はあ、ルーク！」つとH//コアが呼ぶ。

・・・しかし

「……」ルークと呼ばれた青年は無視して歩く。ルークと呼ばれた青年・・・そう、H//コアのパートナー、ティオ（ルーク）だった。

「ちよ、ちよっと、ルーク！」「と書いたH//コアだが

また、無視して歩くデイオ（ルーク）

「お前……」つとコートが走ってデイオの腕を掴む。

そして、

「お前ら……だれた？」つと言ったデイオ（ルーク）に驚く二人  
「誰つて、何言つてるの？ルーク。」つと言ったエミリアは、泣き  
そうな声で言つ。

「ルーク？悪いが人違いだ。俺の名前はルークじゃない」つと言  
いコートの手を自分の腕から優しく離させる。

「あんた、何言つてるの……もしかして、まだ怒つてるの……？」  
エミリアの目から涙がでてきた。

しかし、ディオは

「あんたもしつこい人だな、俺はルークじゃないっていつてんだろ  
……！」つと怒鳴るディオ（ルーク）。

「ルーク……」

「まったく、」つと言ひ歩き出すデイオ。そして惑星移動の大型船  
(電車みたいな乗り物)に乗るデイオ。

「ルーク！！」つとエミリアが走り、今度はエミリアがデイオの腕  
を掴む。

「……加減にしやーーー」 つとおもこつてH//リ亞の手を離す。

「……」 つと驚くH//リ亞を無視して船に乗るトイオ。そして船は飛び立つていった。

「ルーク……」 つと膝を地面に付け、顔を手でおさえ、泣くH//リ亞。

「H//リ亞……」 ゴートはH//リ亞に言葉をかけようとしたが、やめた。 いつの時、なんと声をかけたらよこのかわからなかつのである。

つとの時、

H//リ亞がクラウチに通信をした。

「もしもし、お父さん。」

『も、もしもしH//リ亞か? びびだつ……びびつたH//リ亞? 何で泣いてるんだよ?』

「実は、ルーキを見つけたの。」

『何? ルーキを見つけた? それでなんで泣いてるんだ?』

「もう、ルーキは……ルーキじゃない。あたしの知ってるルーキは……もう、何処にもいない……」

『…………どう意味だよ、それ……』

~~~~~

『……わかつた、お前ら、とりあえず、戻つてこい。』

「わかつた」

「大丈夫か? ハミワア」 つとゴートがハミワアに聞く。

「うん、大丈夫。とりあえず帰る。」 つとハミワアとゴートは船に向かつて行つた。

その光景を見ていたディックが。

「本当に、よかつたんですか? テイオ君」 つと呟いた。

## 第一話・嘘と眞実2（後書き）

まだまだ嘘と眞実は・・・

ゴート「お前がエミリアを泣かしたなーー！」

な、泣かしたのはルーク（ディオ）で

ゴート「ルークがエミリアを泣かすわけがない」

ちよ、ちよつと、待てゴート話を・・・わや～

エミリア「・・・」

ディック「誤字、脱字がありましたら、教えて下され（ほやほや）」

## 第一話・嘘と眞実③（前書き）

やつ、ほとんじが、余話になつてます。

## 第一話・嘘と眞実③

「モトブウ・カジノシティー」

「・・・」

わいわい、

「・・・」

がやがや

「どうやら、船を間違えたな。」

つとディオは右手を顔に当てた。

「ま、せっかく、カジノに来たし、少しだけやりうかな?」つと考

えていた。

「ルーク・・・せん?」つと声がした。

不意に、偽名の名前を呼ばれたので、ティオは振り返ってしまった。

「あ、つと思つたが、すでに遅かつた。

「やっぱり、ルークさん……どうして、こんな所に？」リトルウイングからいなくなつたつて、エミリアから搜索の手伝いをしての通信がありましたよ！」声をかけた人物。それは、ガーディアンズのルミアだった。

「お、俺はルークって名前じゃない。」つと行つてみたが……。

「では、何で振り返つたんですか？」

「う、後ろから、声をかけられたひ、普通振り向くだり？」つとつてみたが、

「知らない方の名前だったら、普通、振り返りませんよ。」つと言ひ返えされた。

「…………」何も言えなくなつてしまつた。

「ルークさん？」つとルミアが言ひ。

「仕方ない、……久しぶりだな。ルミア。元気だつ……」  
だつたか、つと言おひとしたディオだが。

「ルークさん！…それよりも何で、リトルウイングを飛び出し、失踪をなんてしたんですか？それよりも、何で、ここに？」

「君こそ、何で、ここに？君が来るよつたな場所じゃないだ

「ルークさんも同じですよ。ルークさんもこのよつたな場所に来るような所じゃありません」

「話せば長くなる。…。すべて話せないが、話せる所まで話をしてくれ。」つとルミア。

「わかりました」つとルミアは答えた。

「立ち話もあれだし、あの店で話すよ。」つとその店に歩いていくディオ。そのあとをルミアがついていく。

（喫茶店）

数分後

「そういう事だったんですね。」つとルミアが言った。

「言つた内容は、自分の名前についてだけ。まだ怪しい5人の話をし

ない。まだ正しいと決まった分けではないし、かえつて混乱するので、自分の名前だけ話した。

「じゃ、これから『ティオさん』って呼べばいいんですね

「ああ、頼む。あと、Hミリア達やガーディアンズの連中には秘密にしてくれないか？」

「わかりました。その代わり……」「ヒルミア。

「その代わり?」「ヒト闘<sup>ヒトク</sup>『ティオ。

「何か奢つて下さい。」「

ヒルミアが言<sup>ヒ</sup>つ。

「奢るだけで、いいのか?」「ヒト笑いながら『ティオが言<sup>ヒ</sup>つ。

「はい、もちろん高いのを食べますよ。」「ヒト答えたルミア。

「秘密にしてくれるなら、それぐらい構わない。」「ヒト言<sup>ヒ</sup>フルーク。

「ヒトブウ、カジノシティー

「ヒトでルミア?」「ティオがルミアに質問する。

「なんですか？」

「さつきも言つたけど、何で、君がここに？」びりやけり、会つたときの話のようだ。

「ああ、それですか？ 実は他の任務で来てたんです。」

「他の任務？」

「カジノで悪質な手を使い、メセタを儲けてる犯人を捕まえに来たんです。犯人を捕まえた後に、あなたにあつたんです」

「そうだつたんだ。」

「ルー・・・ディオさんは何で、ここに？」ルークつて言いかけた、ルミア。

「・・・船を間違えた」

「えつ？ 船を？」

「ああ、」

「ふつふつふ、」つとルミアが笑う。

「な、何がおかしい？」  
ディオも笑いながら聞く

「あなたもそんなミスをするんだなって」「

「俺も、1人の人間だよ。失敗したりする」

「…………リトルウイニングを抜け出したのは」 つと少し小さめな声で聞くルミア。

「…………まあ、俺も、わからない。」

「…………」

「…………」

「ティオさん…………」

「何だ？」

「いなくならないで下さい」（小声）

「えつ？」

「何でもありません。それでは、失礼します」

「ああ、」

つとルミアは走つて立ち去つていつた。先に行かせたガーディアンズを待たせているのだろう。

「さあ、俺も、行くか。」つと『トイオモ』の場を離れた。

？？？？～

？「・・・・・」

？3「・・・・・」

？2「君たちその辺にしなよ。」

？4「そ、そうシスよ。今ははもめてる場合ぢゃないシスよ。」

？「・・・・・」

？3「ふん、今日は勘弁してやる」

？「今、戦つても、いいんだが？」

？3「面白い、相手になつてやる」

？5「よさねえか、お前ひ。喧嘩なうじこかいつてされ

？2「だから、今はもめてる場合ぢゃないこつて。」

？4「みんな、仲良くなーしへ」

? 「・・・」

? 3 「・・・・・」

? 4 「さあ、握手ツスよ、握手。」

? 3 「・・・・・」

トコトコ

? 2 「あ、ひょっと待つてよ」

? 4 「何で、仲良くできないツスかね」

? 5 「さあな。」

? 「（人形め、俺の考えた計画をバカにしやがって）」

? 4 「何やつてるんツスか？ 置いていくツスよ

? 「（まいい。あの馬鹿を殺して、違うやつを呼ぶか。どうせ代わりは、たくさんある。）」

? 「バリン、ちょっといいか。」

バリン（?3）「なんだよ」

? 「お前ら、先にいってくれ」

? 2 「わかりました」

? 4 「早く来てください」とスよ」

バリン「なんだよ、用つ・・・・・」

グサツ

バリン「・・・・・」

バシユツ

バリン「・・・・・き、きさ・・・・・」

グサツ、バシユツ、グサツ、バシユツ、グサツ

バリン「や・・・・め」

? 「消える。」

ビ――――ン――!

? 「・・・・・」

? 「（所詮、人形は人形か。）」

ピッ、ピッ、ピッ

? 「俺だ、バリンが死んだ。早急に代わりをよこせ。今度は『ゴリ』を寄越すな。きちんとしたやつをよこせ。じゃな。」

? 「やつ（人形）の代わりが来るまで、どうしようかな？・・・ルークとやらと、遊ぶか。いずれ戦うはめに合つ。先に殺しておくか。奴らが奴ルクを失えば、二つのもんだ。」

ゾクツ、

「――な、なんだ、この感覚は・・・」

（一種族部隊・拠点）

「ディオの兄貴に俺達の事を？」

『嘘、偽りなく、正直に話したよ。彼も疑わなかつたよ。』

「そりゃ、それは、よかつた。話がわかる奴で。」

『本当に、よかつたよ。せっぱり真実を言つのは気持ちいいね』

「兄貴は真実がほとんどだし、嘘はあまり言わないもんな。」

『・・・・嘘は、そのうちバレ、その人からみんな離れていく。嘘はたつた一つで絆を切らしてしまう可能性があるんだ・・・』

「兄貴？」

『（ティオ君、偽りは・・・・ほどほどに頼むよ・・・・。君が必要なのは、僕達じゃない。リトルウイングの皆なんだよ）』

## 第一話・嘘と真実（終）

## 第一話・嘘と眞実3（後書き）

第一話・嘘と眞実終了です。

謎の5人の1人が死にましたね。今は4人ですが、また5人になります。

誤字、脱字がありましたら、教えて下さい。

## 2 1行動開始（前書き）

第三話はもう少ししてからです。  
ついに謎の5人の1人が行動開始。  
どうぞ、ご覧ください。

## 2 1 行動開始

？？？？？

ここに、2人の人がいた。何もなく、来ても意味のない場所。そして、

？「今日からお前は、俺達の仲間だ」

？3「バリンさんの代わりに、頑張ります。」

？「バリンの代わりをしなくていい、自分の力で頑張ってくれ。」

？3「わかりました」

？「敬語は使わなくていいぞ。さてと、あいつらの所に行くんだが、俺は用事がある。先に行ってくれ、場所はここだ。」

？3「了解！！」

？「また、後でな。」

## （パルム大都市）

ここに、1人の青年がいた。惑星移動船（バスみたいな感じ）を間違えたので、パルムに戻つて来たディオ。しかし、

「うーん、自室に忘れ物をした。」

「船はないし、taxi船に乗つて、いやいや、ならクラッド6行きのbus船に乗るか、人ゴミに隠れて行つた方がいいかも。依頼、最近多いから大丈夫だろ・・・。多分」つと心配したが、とりあえずリトルウイングに帰ることにしたディオ。そして、クラッド6行きのbus船に乗つた。

## （リトルウイング・ロビー）

「（やっぱり、人が多いな）」

リトルウイングに着いたディオ。そして、

「（ここでバレたら一巻の終わり、気を付けて進もう）」回りの目を気にしながら、自室に向かうディオ。そして、

「（やべ、 bask だ！）」つと思わず、顔を反らす。

「んっ？」

「（き、気付かれたか？）」

「お前、」

「（終わった・・・・）」

「こいつは、我々の家だぞ。事務所はあっちだ。」<sup>マイルーム</sup>と事務所を指す。

「（あぶねー）・・・・コクリ」と頷き、事務所を向かい振りをして、バスケが何処かに行つたのを確認すると、急いでマイルームに向かつた。

「あぶね、バレる所だった。とりあえず・・・大丈夫・・・だよな」つと不安はするが

「とつとど、済まして帰ろ」

（ルーク・マイルーム）

（プシュー）

「（よかつた、開いたよ）」

自分のカギで開くか心配をしていた。何しろコトルウイングを飛び出しへカギを変えたか心配をしたからだ。

「（俺がいつでも帰つて来てもいいよつて、つてことか？）」つと考えた。ルークのパートナーマシナリー（以後マミ）は調整中だ。

「さつさと、持つて帰る。」つと奥に進む・・・・・。だが

「ト、

「…?（誰だ?）」つとティオは慎重に音をたてずに恭恭敬敬して音をした方へ顔を覗かせる。。

?「待つてたぜ、ルーク」

「…?誰だ」

?「失踪したの?」元気なまか帰つて来るとは、勘を頼るものだ。

「

「質問に答える?...」

つとティオが言つ。

?「口がわりいーなる。もつじし利口なしゃべり方をしきるよ」つとばかにした言い方で言つ。

「お前も一緒にだろ?」

？「俺はそんなに口は悪くない。」

「そんなことはいい、質問に答える……。」

？「声、出してもいいの？お前が帰つて来たことがバレるぞ。」

「答えるって言つてるんだ。」

「仕方ない、俺の名前は、ルーティン。ルーティン、インガム。みての通りヒューマンだ」つと言つルーティン。

「偽名か？」つとディオ

「お前とは、違う。俺は偽らないからな。」

「……？なぜそれを？」

「教える、必要はない。どうせ死ぬんだ。」

「俺をあまりなめない方がいいぞ。」つとシップウジンライを構える。

「やれやれ、こんな場所で戦うなんて……ま、いいか、どこで戦つても死ぬんだから。」つとルーティン

「なめるなつて言つてるんだよ。」つとディオ。

「じゃ、戦つてみるか？もう、結果は分かるけど……。」つと

い、武器を構える。

「なめるなーー。」ヒルーテインに襲い掛かる。しかし、

カツキ～～ン

「ツツーーー。」

「やるな

手を上下に振る。ヒルーティアの手が痺れたらしく。

そして、少し離れるティオ。ルーテインが持っていたのは。

「なんだ、その武器？」

「これが？武器屋のオヤジに頼んで作ってもらつた。その名も”ブラックソード”だ。」

「名前にセンスがねえな

「まつまつまつま、名前より、その武器の効果や」

「なに？』

「この武器は、相手の力を1倍を利かせる武器だ。」

「分からずやすくはづと、お前の攻撃して、俺がお前の攻撃を受け止

めたとしよう。その受け止める威力の一倍+俺の威力。更に攻撃の威力は、受け止めた威力の一倍+俺の威力、つまりだ、お前の威力を一倍して利用をさせてもらひつて事だ。」

「そんな技術、聞いた事はない」

「そりゃそうさ、俺はこの世界の人間じゃねえからな。」

「なんだと？」

「この宇宙に、あの3つの惑星だけではない。あの3つの他にも惑星がある。宇宙は広いからな。それに、この世界の技術は……ゴミだ。」

「なんだと。」

「こんな技術じゃ、俺には勝てない。俺の世界の技術は、これ以上・・・いや、はるかに上だ。それに、グラール1位、2位の頭脳を持つ・・・えっと、エリアンだったか、リリアンだかわからねえが、俺の世界じゃ・・・クソだ。」

「チツ

ディオの方で何かがキレる音がした。

「てめえ・・・・・調子に乗るな！－俺をコケにしようと構わねえが、仲間をバカにするな。エリアン？リリアン？相手

の名前はHミリアだ……」

「やうやく、その名前。あの頭脳じゃもつと努力が必要だ」

「もういい、貴様をここで殺す……」

「面白い。来いよ。実力の差を見せてやる」

「俺をなめるな……」

（リトルウイング事務所）

「帰ったか。」つとクラウチがエミリアが事務所に入つて来たのに気が付いた。コートは修行をするつて事で、村に送つて帰つた。

「……」Hミリアはなにも言わない。

「大丈夫か？」つとクラウチが聞く。

「クリツ つとHミリアが頷く。クラウチはこれ以上聞かなかつた。  
そこへ

（プシュー）

「帰つたぞ」つとユーマンの女性が入つてきた。

「ナギサか？どうだ？何か情報が手に入ったか？」 つとクラウチがナギサに聞く。

「貴方に、通信で伝えた通りだ。」 つとナギサは答えた。

「そうか……」

「それより、H//リニアはどうした？元気が内容だが？」 つとナギサが言う。

「ああ……」 つとクラウチが言おうとしたが、しかし、

「実はね……。」 つと H//リニアが言った。

「H//リニア」 つとクラウチが言う。

「くよくよしても仕方ないもん。もう……過ぎた事だし……。」

「

「？？」

「ナギサ……実はね……」 つとH//コアが言おうとしたが、

ドタドタ、ドタドタ、

プシュー、

「た、た、た、大変です」リトルウイングの社員の男性が慌てて入ってきた。

「なんだ、どうした?」つとクラウチ。

「どうかしたの?」

奥からウルスラとチャエルシーが出てきた。

「ナニカ、あつたノ?」

「ル、ル、ルークのマイルームの」

「ルークのマイルームでどうしたんだ!!」つとクラウチが聞く。

「ル、ル、ル、・・・ルークが血塗れで倒れます」

「――――――――――」

クラウチ、エミリア、ウルスラ、チャエルシー、ナギサは、急いでルークのマイルームに向かった。

「ルーク!!」

「ルーク!!」ヒミコアが叫んだ。

しかし、

「 「 「 「 「 …… 」 」 」

あちこちに、血が飛び散つていており、部屋は散らかり、壁にはキズや穴が空いている。さらにルーク（ティオですが、しばらく、ルークになります）の体に無数の傷が付いていた。

「ルーク！！」エミリアが呼んだが、返事はない。

「ルーク！！

エミリアがルークに近寄り、身体を起こすが、

「エミリア！！あまり触るな！！」っとクラウチが言つ。

「だつて、だつて」エミリアは涙を流している。

「クラウチ、とりあえず、ベッドに寝かせましょう。」

「わかった、チエルシー、事務所から医療用バックを持ってこい。ナギサは医者を呼べ」

「わかった」

「了解ネ」

2人が部屋を出る。

つとそこへ、

「兄貴、遅かつたみたいだぞ。」

「うん、彼らもついに動き出したみたいだね。」

「兄さん、それより早く応急措置をしないと」

「そうだね、医療用バックは持つて来た?」

「ここにあるぜ。兄貴」

つと会話をしているのはティック、ソロ、ミケの3人だった。

「なんだ、てめえら。うちの社員じゃねえな。」つとクラウチが言った。

しかし、クラウチの話を無視し、応急措置をするティック。そして、

「よし、とりあえず応急措置は済んだ。病院に連れて行こう。」

「おい、入つて来い。」の声の後に、ビーストの2人が入つて來た。

「てめえら、無視すんな。」つと怒鳴るクラウチ。

「話してる暇はない。」つとソロが言つ。

「ルークをどうするつもりだ。」

「どうするって、病院に連れて行くに決まってるじゃん」「とにかく」とミケが言つ。

「今は、ほんの応急措置をしただけ。早くしないと、死ぬよ。」「とティック。

「てめえらを信用できるか。」「とクラウチ。

「早く行こうぜ兄貴。じゃないと本当に危ないぜ」

「そうだね。」っとルークを担架に乗せ、ビーストの2人が運び扉に向かう。

そこへ、HILLIARIAが扉の前に立ち塞がつた。

## 2 1行動開始（後書き）

次回は第三話・・・ではあります。

誤字、脱字がありましたら教えてください。

## 2 2大切な人（前書き）

2 1の続きです。内容は自信がないです。

今回は『ディックの秘密も少し、明らかになります。

では、どうぞ。

## 2 2大切な人

「何の真似かな?」つとドイツ達が出よつとした、扉に立ち塞がるHミリアに言った。

「ルークをベッドに寝かせて」

「悪いけど、それは、無理な願いだね」つと言ひ、Hミリアをどけ、ドイツ達は、ルークの部屋を出る。しかし、Hミリアは部屋を出た、ドイツ達の前に立つ。手にはクラーリタ・ヴィサス?を持つている。

「ルークをベッドに寝かせてって、言つてゐるの。」つとHミリア。

「手遅れになるぞ、」つとソロロが言つ。

「あんた達が連れていくなら、あたし達が連れていく。」

「何でだい?」

「・・・」

「君は僕達を知つてゐるはずだ。」

「信用してないからよ。」

「じゃ、信用しないままでいいよ。でも、病院に連れていく」と歩き出す。

「勝手なまねはさせない。」医者を呼びに行つたナギサがティック達の前に立っていた。愛用の武器、ステイールハーツ？を持つている。

「ルークを置いていけ。」クラウチ、ウルスラ、がそれぞれ武器を構える。

「…………じゃ、無理でも通ろつか？」ヒルケがゼロセイバーを構える。

「そうだな、仕方ないが」「つとソロガラヴィス＝カノンを構える。

「争ってる場合じゃないって」「つとティック。

「だが、兄貴」つとソロ

「何をもめてる」「つとナギサが攻撃を仕掛ける。  
だが、ナギサの攻撃が防がれた。

ティックの武器によつて、

「仕方ない……」

ティックの目の色が変わる（茶 赤）

「田の色が変わった」 つとH//コアが言つた。

変わったのは、田の色だけじゃなかつた。ディックの身体の回りに怪しいオーラが纏つてゐる。

「俺も、こうなつては仕方なねえ。お前達との絆は諦める」 つとデイック。

「何・・・・・あいつの黒いオーラは・・・・・」 つとH//コアが言つた。

「油断するな、H//リア。！..」 つとクラウチが言つた。

「油断も何も、お前達は俺には勝てないぞ」 つとディックが笑いながら言つた。

「私達をなめない方がいい」 つとナギサがスティールハーツ？を構え直す。

「それは面白い、相手になつてやる（君たちとは、戦いたくなかった。でも、ディオ君を助ける方が先だから・・・・・ディオ君すまない）」 つとディックがディオス・デスペルタルを構える。

そして、

「なにを・・・・・争つ・・・・・てる」 つと声がした。その方向へみんなが向く。

「おい、よせ」

「じつとしてる」 つとのビーストの一人が言つた。

だが、ルーク（ディオ）は  
担架から降りる・・・いや、落ちる。

「ルーク！」エミリアがルークに近寄る。

「エミ・・・リア」つと力無く言つ。

「ルーク・・・動くな」ナギサも近寄る。

「大・・・丈夫・・・だ」

「どう見たつて、大丈夫に見えないよ」つとエミリアが言つ。

ルークがよろよろになりながらエミリア肩を借りて立つ。だが、立ち上がる力が無いのか、倒れるルーク。

「ルーク！！」つとエミリアが近寄る。

「ゴホッ、ゴホッ！」つと口から血を吐くルーク。そして、また、エミリアの肩を借り、立ち上がる。

「ルーク、無茶しないで！！」

「大・・・丈夫だ・・・それ・・・より」ルークがヒヤツカリヨウランをディックに構える。

「その傷でよく立てるな」つとディックが言つ。

「それ・・・が・・・転・・・生の・・・力・・・か？」  
つとフランフランになりながら立っているルークが力無く言つ。

「そうだ、闇の転生つて言つて、闇を力にする転生……普通の人間では、制御が出来ない。お前なら制御出来るかどうかだが……」

「興・・・・味・・・・ない。」つとルークが答える。

「まつ、どうでもいいけど、まずは、お前の傷を手当てしなければ」つとディック。

「お・・・・前ら・・・・の転・・・・生・・・・つて・・・・言葉・・・・も変わ・・・・るん・・・・だな。」つとルークが言つ。

「二重人格つて思えばいい別に気にならねえよ」つとディックが答える。

「ディ・・・・ルークさん、早く僕達の船に乗つてください」つとミケが言つ・・・しかし、

「悪・・・・い・・・・が・・・・」

バタツ!!

ルークが倒れる。

「ルーク!!」つとエミリアが近寄る。

「大・・・・丈夫」つと答えるルーク。

「早くルークの兄貴を連れて行こうぜ、兄貴」 つとソロが叫ぶ。  
しかし、

「いや、こなま帰るぞ。」 つとティックがいい、医療用バックを置き、立ち去る。

「兄貴！」「兄さん！」「ティック様……」 つとソロ、ミケ、ビーストの2人がティックの言葉に驚く。

「これで、ルークを治せ。」 医療用バックを指すティック。

「いいのか？ 兄貴」 つとソロが聞く。

「どうせ、コイツらは、ルークを連れて行かれるのは、いやみたいだしな」

「当たり前よ。コイツは……ルークは、あたし達の大切な家族でもあり、あたしのパートナーなんだから……」 つと答えるエミリア。

「HIII・・・・リア？」 つと力無く言つルーク。

「あなたには、助けられてばかりだ。だから、今助けなければ助けられなくなる」 つとナギサ。

「何……か、俺……が死……ぬみ……たい……  
だ……な。」 つと笑いながら言つルーク。

「お前のよつな、バカで面倒な奴がいないと盛り上がらないしな。」

「本当ね。」つとウルスラも笑いながら言つ。

「お…………お…………い…………。」つとルークが言つ。

そして、医療用バッカを持つて来ていたチエルシーが  
「本当や～。アナタハ、最近、心配ばかりだかけてるモンネ～。」  
つとチエルシーが言う。

「そ…………そ…………か？」

「本当よ、」つとエミリア

「まつたくだ」つとナギサ。

「それより、ルークをベッドに移動するぞ」つとルークの肩を貸す。

ナギサもルークの肩を貸す。

「すま…………ない…………ナギ…………サ…………クラ…………  
ウチ…………」つと肩を借りたルークだが、ルークが前に倒れかけ  
る。つとそこへ、

「大丈夫？」つとエミリアが前からルークを支える。

「すま…………ない、エミ…………リア」つとルークは言つて、エ  
ミリア達と自分の部屋に入り、ベッドに寝る。そして、そのまま寝

息をたてる。

「帰るぞ。」つとトイックが言つ。

「本当にいいのか？兄貴？」つとソロが言つ。

「あいつとの絆を切るわけには、いかない……。」「ほーほー旦帰  
るぞ」ひとつの場を離れるトイックにクラウチが……。

「ちょっと待て

「なんだ？」つとトイック

「てめえらは、何者だ？」つとクラウチが聞くが。

「ルークから聞け。」つと言つてその場を去るトイック、ソロ、ミ  
ケ、ビーストの2人。

「待て、話はまだ……」つとナギサが何か言おうとしたが、

「分かったわ」「ヒミコアが言つ。

「ヒ、ヒミコアー？」つとクラウチが驚く。

「答えてくれるか、分からないけど、それに……」「

「それに向だよ。」つとトイックが言つ。

「ルークの怪我も治した。とりあえず、あんた達を信じる」「ヒ  
ミコア。

「あつそ、ま、詳しい事はルークから聞きな。もしらしたら、また、来るかもな。」つといい、ミケの肩に触る。

「頼んだ、ミケ」

「ハイハイ、任せて」つと何か呟くそして、

「「「「「……？」」「」「」」

「消えた！！」ナギサが言ひ。

エミリアも最初は驚いたが、ミケの特殊能力の事を聞いたので、そんなには驚かなかつた。

「ちつ、いろいろ聞きたかつたが、しかねえな。」

「お父さん・・・・・あたし・・・・・ルークの看病しちゃだめ？」つとエミリアがクラウチに聞く。

「・・・・・何でだ？」つとクラウチが聞く。

「ルークに助けられてばかりだし、それになりより・・・・・あたしの大切なパートナーだから。ルークがいたから、あたしは変われた。だから、守つてあげたいの。今度はあたしがルークを守る。」つとエミリアが真剣な目で言った。

「・・・・・」

「お父さん

「何言つても聞かねえだろが、お前はよ」つと右手で頭をかきながら言つて、クラウチ。

「じゃ、私もルークを守るぞ。」つとナギサが言つ。

「分かつた、分かつた」  
つとクラウチが答える。

＼＼＼＼＼

「ルークが見つかった事だし、捜索の方は終了することと社員に伝えとく。」

「ええ、そうね。しかし、ヒリコア達、ルークの為に良く真剣に探したわね。」つとウルスラが言つ。

「そうネ。ルークのためとはいえ、チョーツトネ。」つと顔が笑つてるチエルシーが言つ。

「あら?チエルシーも?実はわたしもよ。」ウルスラも顔が笑つてる。

「どういづ意味だ?」つとクラウチ。

「やつこつ意味よ」

「？？？？」

ここに1人の青年がいた。服はぼろぼろで、服は血だらけ、頬には傷痕がある。しかし、服の血は自分の血ではない。その青年の正体・・・ルーテインだった。

「・・・・・」

「（あんな、武器で俺に傷を負わすなんて・・・・・ディオ・・・・。まあ、ディオを殺すのは失敗だが、もう1つの目的は達成した。・・・しかし、今回は疲れた。少し休んだら探すか。素材となる・・・人間を）」つと休む場所を探すために、ホテルを探すルーテインだったが、

「おつと」つとふらつくルーテイン。

「（ここまで、俺を追い込むとは、ディオのやつ、あの力をどこで・・・やはり、あいつの・・・・）」つと考えながら、姿を消した。

## 2 2大切な人（後書き）

第三話はまだ先です。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

つていうか、今年はもうおわりか、 今度の投稿は、来年ですね。

ソロ「っとか言って、 投稿をサボるなよ」

うん、 大丈夫

ミケ「サボる前に、 見る人いないんじゃない？」

えつ？そ、 そんなことない。 つと思う。

ディック「来年もよろしく。」

## 2 3ルーテイン・インガム&amp;ルークの怪我（前書き）

明けましておめでとうございます。これからも頑張って、書をますよ。今年も頑張つて、良い小説を・・・。

HIIコア「では、どうぞ。」

## 2 3ルーテイン・インガム&amp;ルークの怪我

ルーテイン・インガム

種族：????（見た目はヒューマン）

年齢：21歳

タイプ：アサシン（ブラック惑星のタイプ）

髪色：銀髪

一人称：俺

服装：闇のフード（ブラック惑星の服）

謎の5人の1人。ブラック惑星でも一位、二位ぐらいの強者。いくつかの惑星の強者を倒し、惑星を滅ぼしてきた。だが、ブラック惑星では、それを英雄扱いを受けている。グラールで戦ったルークに初めて傷をつけられるがルークには勝つ。ルークを止めを刺そうとしたが、ルークの反撃をくらり、失敗に終わり、やむを得ずその場から離れる。今は、単独行動をしている。何をたくさんでるかは、ルーテインの仲間でも不明。

（五ヶ月前

（欠片事件から一ヶ月後）

（惑星ゼロ）

ここに2人の青年がいた。1人の青年は武器を持っている。もう1人の青年は地面に倒れている。

ズバツ、ブスツ、巴萨ツ、

ドッカーン、

「ふん、この惑星の1位、2位程の実力者って言うから、張り合いがあると思ったが・・・雑魚だな」つと持っていた武器をしまつ。

「しかも、研究も使えない」「ハハばかり・・・・。やはり、俺達の惑星の研究が一番だ。」つと/or/いう青年。

つとモード・モード・

ペペペシペペペ

無線に出る青年。

『ルーテイン、どうだ』

「実力者って名乗る連中を倒した。片手だけでも、倒せる」「だつたけどな」

『せつか、よくやつた』

「後は、『ミリ共の掃除は頼む。」

『分かつた、今から出発する。』

「じゃ、俺は帰らせてもらひつ

『今、迎えをみつけ』

「いや、いい。』

『瞬間移動ですか?』

「ああ、俺のは、距離関係なく使えるからな

つとルーティンが瞬間移動を使い消えた。

（惑星・ブラック 大都市）

「てめえ、金出せーー。」

「ゆ、許して下さー。」

「お前が俺にぶつかつたから、怪我したんだよ、だから金出せよー。」  
「つと不良は武器を向ける。」

「は、はい。すこません」つと青年は金を出す。

「全部出せーーー！」

つともひとつ金を出すよと言ひ。

「もう、ありません」

その光景を見ていたルーテイン。だが、無視をし、先に進む。

「（弱いからいけないんだ。ここでは強いものが勝つ。）」つと自分が家に着いたらルーテインは自分の家に入つていった。

一ヶ月前

（欠片事件から五ヶ月後）

／ルーテインの家／

仕事終わり自分の家に帰ってきたルーテイン。ソファーによじになる。つとそこに・・・。

＊＊＊＊＊

「（いりませんなあ）」

ピ  
シ、

通信には出さずに、通信を切る。

ପ୍ରକାଶକ

「はい」

ヒ  
シ

『おい、ルーテイン！！何で通信を切るんだよ！！』

『うるせえからだよ。今帰つたばかりだからだよ。  
『だからと言つて切るな！』

「つで、何だよ。」

『今度のお前の行く惑星が見つかつたぞ。』

「またかよ、他のやつらに、行かせろよ」

いや、お前に行かせると、『あの人』からの命令だ。

「あの人から？なぜだ？」

『さあな、後、ついに、お前が言つていたやつができるみたいだぞ』

「 そうか。じゃ、その惑星で試すか。」

『そらじてくわ』

「うだつの惑星は？」

『「ヒーリーから近くにあるのか？』

「ヒーリーから近くにあるのか？」

『「ヒーリーから離れているが、その3つの惑星は、一つ、一つわりと近くにあるらしい』

「でも、3つとなると面倒だな」

『「どうやるかは、あなたの知恵次第だ』

「分かった。つまり、実験には、ちよつといい

『「じゃ、頼んだぞ。場所はヒーリーだ。』

「分かった」

場所を聞いたルーテインは、通信を切る。

「その惑星は、張り合のある奴はいるのか。つまり、いなくとも、実験にはちょうどいいのは、確かかもな」つと家を出て、瞬間移動を使う。

## ／惑星パルム／

「（何だ？）この惑星の連中は、変わったやつが多いな。」

「（耳が尖ったやつ、耳が変わった形のやつ。機械のやつ、肌  
が白いやつ。何だ？）（むひひひひひひ）」

ピシ

『ルーティン、どうだ？』の人間共は？』

「変わった連中が多い。俺達とは違う。なんて言えばいいんだ？変  
わり者が多いな。」

『それじゃわかんねえよ』

『やうか、じゃ写真を送る』

『……確かに変わった連中だな』

「惑星も多こ、排除するには時間が掛かりすぎるわ』

『じつあらへ』

「情報を集める。この惑星を調べる。分かつたら連絡する」

『分かつた』

ピッ、

♪パルム・大都市 図書館♪

「（なるほど・・・）」の惑星には、五種族の種族があるのか。

「ルーティンが本を読んでいる。

「（ヒューマン、俺と同じだな。）」

ペラ、

「（ん？これは・・・）」

「（なるほど、五百年戦争・・・四種族が戦争か。今度は五種族の戦争・・・これは使えるな）」

ピッ、

「ルーティンだ。どうだ？」

『あなたの相変わらずの少ない情報通りに造つてゐるが（情報伝達済み）、時間がかかるな。初めての事だからな。だが、安心しろ。完成させるからよ』

「頼んだ。」

『ん？』と待った

「どうした？」

『どうやら、完成したらしく』

「（時間が掛かるつていったのに……、どうこうの頭脳を持つてるんだ？うちの惑星の研究者共は。）」

『今、そつぞく行へよう』

「分かった。」

「（彼らの滅ぼすには、そこからの力が必要だからな）」と本を元にあつた場所にしまう。

そして本を戻した場所に置いた時、不意に隣の本に目がいく。

「（ん？）」

ペラッ、

「・・・・・、」

真剣に読む

「・・・・・、」

真剣に読む

「・・・・・」

内容に驚く。

「ふつ、」

つと小さく笑い、その本を戻した。

「（もつ、勝つたもんだ……）この惑星も対したことない」と図書館を出るルーテイン。

「いや、この惑星は、他の惑星とは違つ。」

「倒さなければならぬ、奴らが多いから、少しあは楽しめそうだ……」

つと図書館を出たルーテイン。そして、人の目が行かない所で姿を消した。

（ルーテインが姿を消した数日後）

「早く、早く、ルーク。」

「遅いと置いていくぞ。」

「あんな、俺たくさん荷物持つてんだぞ・・・・・」  
ながら2人の女性についていくルーク。

「あっ、あっちの店も行こうよナギサ。」

「そうだな。」

「エミリア、ナギサ、いい加減帰らないか?」  
つと言つたが無視をし、店に入つていくエミリアとナギサ。

「はあ～～」ため息をついたルークがエミリア達の後に続く・・・・・が、

きや～～、

うわあ～～、

助けて～～、

「！～！」つと悲鳴がした方向に振り向くルーク。

「な、何?今の悲鳴」つと焦るエミリア。

「隣の店から、聞こえたぞ」

つと隣の店に指を指すナギサ。

つとその時

「……ル、ルーク！」「つとエミリアが叫んだ。

ルークが悲鳴の聞こえた店に向かって入つていった。

「ま、待て、ルーク」その後を追うナギサ。

「ちょっ、ちょっとナギサ！？」つとエミリアも後を追つ。

（）

「金を持つてこい。今すぐ持つてこないと、一人ずつ殺すぞ」

バキューん、天井に銃弾を撃つ。

きやーー

「（強盗か……）」物陰で犯人の様子を見る。

「（強盗は……一人か……よくまあ一人でやるな）」

「「ルーク。」」つとルークの後ろから、ルークを呼ぶ声がした。

「「うわ、ナ、ナギサか」」「何が起きたの？」エミリアも来ていた。

「「強盗だ。犯人は見える限り一人だな。」」つと言つたその時、

バタバタバタ、

「「「！」？」」

「ガーディアンズだ。武器を捨てて投降しろ。」

「「おいおい、人質がいるんだぞ」」

「ガ、ガーディアンズが怖くて強盗なんかできるか～」つと強盗犯は 銃弾を一般人に向ける。

そして、

バキューン

きや～～～

銃声がした・・・・。しかし、当たったのは、

「うわあ～～」強盗犯は持っていた、ハンドガンを離す。どうやら、強盗犯のハンドガンにあたり、驚いて離したみたいだ。だから、怪我はしていない。

「リトルウイニングのルークだ！！大人しく投降すれば、怪我をしないですむぞ。投降しないと・・・・」  
つとハンドガンを構えながら言つルーク。

「「エミリア？私達も行つた方がいいのでは？」」

「「ルークが言つたでしょ。」」

「それは失敗だつたな。」

「「！！」つともう一人の強盗犯が持つていたセイバーでエミリア達を攻撃をする。

しかし、

バキューン、

「ぐわ～～

「こうなるぞ。」つとルークが後ろ向きで銃弾を撃つた。いや、前方あつた鏡を見ながら撃つた。

「は、はい・・・・つて、なんてね

バキューン

「！！」

「ルーク！！

「やめ～みる。」

バキューン

「やめ～

「そんなんで俺を倒せるとと思つたか？」 つとルークが言つた。

「捕まえろ！！」 つとガーディアンズ達が強盗犯達を捕まる。

「ルーク！ 大丈夫？」

「大丈夫か？ ルーク」

つとエミリアとナギサが心配する。

「大丈夫だよ。 ただのかすり傷だ」

「でも、血でてるよ」

「ルークさん」 つと後ろから声がした。

「ルウ？ なぜここに？」

「強盗犯を捕まえに来たんです。 それよりルークさん。 早く我々の船に乗つてください。」

「なんで？」

「怪我をしたのは、我々ガーディアンズの責任があります」

「べ、別にあんた達の責任だといつてないぞ」

つとルが言つ。

「しかし、あなた怪我人です。怪我人の方々は我々の船で病院まで連れて行きます。」

「だったら、他の怪我人を病院まで連れて行ってくれ。俺は病院にいくほどいの……おつと、」つとふらつくるーク

「ルーク? 大丈夫?」

「ああ、何か、めまいがするな。」

「めまい?」

「ルークさん、強盗犯のハンドガンを調べましたら、あのハンドガンには、毒が付いていました。」

「毒だと」

「はい、ですので、検査をかねて我々の船で病院まで来ててくれますか?」

「はあ～分かつたよ」渋々ながら頷くルーク。

「あ、あたしも」つとHミリアが行つたが……

「お前達は先に帰れ。荷物があるんだから。」

「でも、」

「何かあつたら連絡するから。」

「じゃあ、行きましょう」

「ああ、」ヒルウの後に付いていくルーク。

ルークがガーディアンズの船に乗るのを確認すると、「・・・帰るつか?」

「買い物の続きをしなくていいのか?」

「もういいよ、それビビりじゃなくなつたし、」ヒルニアが手を上げ、タクシー（このタクシーは空飛ぶ車です。乗客を探す時、乗せた時は低空飛行で移動します）を止め乗る。

「ほら、ナギサ早く」

「ああ、すまない」ヒルニアもタクシーに乗る。そして、エミリア達の乗せたタクシーはエミリア達が止めた船まで向かって行った。

（病院）

「とりあえず、解毒剤で毒の方は除去しました。」

「ありがとうございます」

「ですが、弾丸が身体に入っているので、取り除く手術をしたいん

ですが・・・

「いのままでここよ」

「いけませざ。今は、何もないですが、何が合つた時には遅いです  
み

「じゅうじやく、取ってくれ

「はー?」

「麻酔などしなくていい、今すぐ」

「む、無理ですか。」

「じゃ手術室で、やつてくれ、今すぐ」

「わ、分かりましたよ。じゃこれに遍て下せこ

「担架? 怪我人じやあるまじし」

「立派な怪我人ですよ」

（一時間後

「弾は取つましたよ」

「ありがとハヤシさま」

「定期的に病院に来て下さー。」

「分かつた、分かつた」

「身体に異常がありましたら、すぐに病院に」

「分かりましたよ、では、失礼します」

「お大事に。」

（パルム・病院駐車場前）

「ルーク」とエミリアが手を振った。

「悪いな、エミリア。迎えに来てもらつて」

「ううん、気にしないで。・・・怪我は大丈夫?」

「ああ、解毒剤も飲んだし、薬ももらつた。何か合つたら、病院に  
来いだつて」

「よかつたー、」と安堵をするエミリア。

「じゃ送つてくれる?」

「うん、分かった」

ルークとヒーリアは、船に乗り、リトル・ウイングに向かった。

## 2 3ルーテイン・インガム&amp;ルークの怪我（後書き）

ルーテインの事と、ルークの身体の怪我について編でした。次は第三話にするか、2、4にするか迷っています。

誤字、脱字がありましたら教えて下さい。

## 2 4ミケの失敗（前書き）

ミケの失敗です。ミケの秘密が分かります・・・・多分。  
では、どうぞ。

## 2 4ミケの失敗

（一種族部隊・本拠地、会議室）

「帰ったよ」つとディックが会議室の椅子に座つてゐるソラとリオルに言つ。

「お帰りなさい。」本を読んでいたソラが本から目を離し返事をした。

「お帰り～。」ソードの手入れをしながらリオルが返事をする。

「兄の怪我は・・・」

つとソラが聞く。

「大丈夫だよ。今、リトルウイングの自室で寝てるよ。お見舞いに行つてあげて」つといつもの優しい口調でディックが答える。

「え？連れて帰らなかつたんですか？それより、なぜ兄がリトルウイングに？」

「リトルウイングに、なぜいたのは、知らないけど、連れて帰れなかつたのは、連れて帰れなかつたんだ」

「え？」

「あの場で応急措置して、病院に連れて行くのは嘘で、治つたディ

「オ君をここに連れてくるはずだったんだけど、彼の仲間達に阻まれてね。仕方なくリトルウイニングに置いてきた。」つとディックが答えた。

「なぜ、兄はリトルウイニングにいるのが、分かつたんですか？」

「彼にあげた店のパンフレットに、発信器をつけといたのさ。まさか、怪我をしていたのは、予想外だつたね」

「ところで、ソロさんとミケは？」つとリオルが聞く。

「ソロは、また調査に行つたよ。ミケは、例の検査に行かしたよ」

「ああ、月に一度の検査のやつね」

「うん、本人は大丈夫って言つてるけどね。一応、みて、もうううに言つてるんだ。まさか、こうなる事とは、僕も本人も思わなかつた、と思うよ」

（6ヶ月前）

（欠片事件前・ルークとエミリアがGRM社にいるとき）

（一種族部隊・本拠地・転生室にて  
(ルークと会う前なので「ディオン」になつてます）

「どうだ・・・兄貴？」

「どうやら、成功したみたいだ」

「ディオンが黒いオーラが漂つてる。

「な、なんだか別人にみたいだ。口調も変わつてゐし・・・・」

「俺達の転生は、他のと比べると少し変だかな。」

「いや、だいぶ変だと思つぜ。やつぱり普通の転生がいいんじや・・・  
・・・」

「・・・・、それだと強くなれないよ。」

「口調が戻つた・・・」

「そのうちなれるよ。君もやる?..」

ソロは、右手を降りながら、

「やめとくよ、闇の転生なんて、まるで悪人みたいだぞ。」つと答えた。

「時には、闇の力も必要だよ。あれ?」何かを思つ出したティオン

「どうした?兄貴?」

「ミケは?」

「ミケ?ミケなら、転生するのによつやく材料を集めて、転生するつて、第一転生室に入つてこつたが」

「あの古い転生システムを?新しいのがあるのに、何でかな?ところで、ミケの集めた材料わかる?」

「いや、全部はわからないけど、一つだけなら。あれは分かりやすい、やつだったよ。」

「なんだい?」

「確か、あれは、モトウブに生えてる、ヘンゲソウだったか」

「え? ヘンゲソウ?」

「ああ、間違いない。あの葉っぱの形は・・・・」

「まあいいよ、今すぐ止め・・・・」

「ド」「~~~~~ン!~」

「な、何だ？今の爆発音は？」

「……遅かった。」

つとティオンが咳き、第一転生室に向かつた。

### （第一転生室）

「「ホ、「ホ」ミケが咳をしている。全身汚れている。

「ミケ、生きてる？」つとティックが言ひ。

「な、なんとか……」

「なんともないのか？」つとソロが囁く。

「うふ、それより、ティオン兄さん、ソロ兄さんみて、やつてドモ  
たよ」

「なにが？」つと聞くソロ。

「……」

ティオンが右手で顔に当てる。

「完成したよ。僕の最終兵器、新・マージュブラスト……」つと

いつたが、

「ん？」つとソロ。

「あれ？」つぶやく。

ミケのミラー・ジュブラストは出なかつた。出たのではなく、

「な、何で、」自分の姿をみて、驚くミケ。

「ミハージュブラストじゃなく・・・・なんでナノブラストなの？」  
「つと呟んだミケが倒れ、気絶する。

「ミケー！」

ミケの自室

「兄貴、一体どういう事だ？」つとソロがディオンに聞く。

「多分、ミケは転生を間違えたんだと思つよ。」

「て、転生を間違えた？」

「僕達の転生システム、闇の転生以外かなり古いだろ?」

「ああ、普通に転生するには素材を使わない。つていうか何で転生に、素材必要なんだよ」

「さあ？ 分かんない。」

「ディオンとソロが話していると、

「ん？」ミケの目が開いた。

「ミケ？ 大丈夫？」つとミケに聞く。

「うん、僕……ビリしたの？」 つとディオンに聞くミケ。

「転生にしようとして、失敗したんだ。」 つと答える。

「なんで？ 僕の転生は成功したし、素材も間違ってないよ。」 つとミケが言うが、

「はあ～」

「ディオンがため息をつく。

「よくみてみな」 つとディオンが転生の説明書をミケに見せる。

「「ん？」」 つとソロとミケが説明書を見る。

【ヒューマン、マーティニアージュブラスト強化、転生】

キヨウカノ石

イリヨクゾウカ石

テンセイ石

各ブラストのユニット

【ニユーマン、マーティニアージュブラスト強化、転生】

キヨウカノ石

イリヨクゾウカ石

テンセイ石

各ブラストのユニット

各フォトン（ブースターといつたもの）

【ビースト、ナノブラスト強化、転生】

キヨウカノ石

イリヨクゾウカ石

テンセイ石

ヘンゲソウ

以外省略

「あれ？ヘンゲソウは・・・」

「うふ、ヘンゲソウはペーストに使つんだ。」

「・・・・・」

「でも、間違つて転生したとしても、失敗で終わるんじゃ・・・。  
それにヒューマンでナノブластが使える様になるのはおかしいん  
じゃないか?」つとソロが言つ。

「僕にも分からないよ。何でこいつなつたのか。」つとティオングが言  
つた。

「も、元に戻んないの?」

「うふ、一生そのままだね」

「・・・・・まあ、いいや」

「ず、ずいぶんあつせつしてゐるな」

「失敗したものは仕方ないし、その「つかれると思つよ」つとミケ  
が言つ。

「やうだね。でも、これ以上、ミケの様な人が出ない様に、あの転  
生システム壊すことにするよ。」

「おい、兄貴。別にそこまで・・・・・

「」

「・・・・・」

ペペペペシペペペ

ピッ

『破壊しました。』

「『』苦労様。」つとお礼をいい、通信を切る。

「いいのか？兄貴。かなりの年代物だったのによ・・・・

「ミケの様な人が出ない様にためだよ。」

「多分大丈夫じゃないか？ミケの様なバカはいないし」

「ソロ兄さん、ひどいよ。」

「まあ、それはいいとして、ミケ」つとティオングミケに向く。

「な、何？」

「とりあえず、ミケは検査を受けて。さらに円に一度の検査を受けなさい。」

「え？。」

「奇跡的に成功したんだ。身体に異常がないとは言えないからね」

「わ、分かった」ミケがしぶしぶ頷く。

「じゃあ、ソロは闇の転生を・・・」

「俺は、旧の転生で転生をしたから大丈夫。」

「そつか、じゃあソロは今日はもう床んでいいよ

「分かった」

「僕は？」

「僕と一緒に治療室に行こう。」

「分かった。」

ソロは浴室へ、ディオンとミケは治療室へと向かって行った。

（現在）

「そんな事があったんですね」 つとソラが言った。

「でも、月に一度の検査は多くない?」 つとリオルが聞く。

「いや、もうひとつ検査を続けるよ。後半年だね。半年たつたら、

三ヶ月に一度の検査をする様に言ひよ」とテイックが答えた。

「それよりも・・・・・」

「？」

「君たち、闇の転生を……」

「断る！」

次回 第二話：絆

## 2 4ミケの失敗（後書き）

反省点は沢山あります。

一つは、ヘンゲソウやイリヨクゾウカ石などの名前。いろいろな名前しか思いつかなかつたんです・・・。

つてか、転生に素材が必要なのはおかしいですね。

でも、転生するにはそれぐらいの努力しなさい、つて事にしてください。

## 第三話・絆 1(前書き)

第三話・絆が始まりました。やつやく三話つて感じですね。この第三話・絆は、少し長くしたいと思います。

では、第三話・絆 1を「」見てね。

（夢

『ディオは夢を見ている。ディオの前には、1人の青年がいた。

（会話だけに、なります）

『ディオ！！俺と戦え』

『・・・・』

『どうした！！構えろ！！』

『・・・・無理だ・・・』

『何故だ！！早く構えろ！！』

『他に治療方法があるはずだ。』

『まだ言うか？俺はもう、ＳＥＥＤに感染してるんだ！！もう、助かる道はない！！だから早く

『時間が経てば治る薬も出る。だから・・・』

『待つてたら、取り返しのつかなくなる。むづ・・・・・諦めるしかない』

『・・・・・』

『それに、最後にお前と戦いたい。そして、・・・・悔いのない戦いをしたい。』

『矛盾してるぜ。取り返しがつかないなら、戦わないで、俺が止めをさせばいいだろ?』

『・・・・・お前がそんなこと出来るか?仲間想いのお前が・・・・・』

『』

『・・・・・』

『だつたら・・・・・仲間のために、そしてグラールのために戦えよ。』

『』

『・・・・・』

『これは言つちや悪いかも知れないが、カインも同じだと思つ』

『・・・・・』

『カインも言つてた、自分のせいで、皆が迷惑してるつてよ。特にディオに迷惑をかけたつてよ。』

『・・・・・』

『・・・・悪いな・・・・こんな時・・・・』

『いや、かまわない。あいつは・・・・最後まで俺に迷惑ばかりかけてたよ。』

『さうか・・・・・』

『分かつた。』

『? ? ?』

『お前の望み通り。戦つてやる』

『・・・・・すまねえ』

『かまわない・・・・・いべさー!ー』

『おお!ー!』

（数分後）

『ブライト・・・・』

『はは、やつぱり・・・・・ティオは強い・・・・全然勝てねえ』

『当たり前だ』

『なんだよ・・・もう・・・少し・・・優しい・・・言葉・  
・・・ないの・・・かよ』

『ブライト……あまつしやべるな』

『もう……死ぬ……んだ……話……ぐらい……

『話は治つてからでいい!』

『お前……………本当……………諦め……………悪……………いな。』

『文選』

۷

『おこ、起きたよブリヤト』

• • • •

『ブライト！・ブライト！・』

— 1 —

卷之三

# 「リトルウイニング ルークのマイルーム」

「んつ」

つとゆつくりディオの目が聞く。

گلزاری

辺りを見渡す。

( そ う か 。 )  
俺、確かルーテインに・・・

少しずつ記憶が戻ってくる。

そして身体を起します。身体や手や足は包帯が巻かれていた。

(「……」まで、怪我をしたのか……)

手を開いたり閉じたりする……

(ブライト……)

右手を顔に当てる。そして

プシュー

(んっ？誰だ)

つと、右手を下ろし、ドアを見るティオ。

ドアを開けたのはエミリアだった。

「あっ」

「あっ」

目が合う2人……

「エミリア……」

つとティオが言った瞬間

「ルーク！！」

つと叫んだエミコアが走ってきて、デイオ（ルーク）に抱きつこうとした。

「エ、エミコア？」

不意の事なので驚くデイオ。

「……エ、エミコア。痛い、痛い」

つと叫ぶデイオ。だが、エミコアはさらに強く抱き締める。

「マ、マジで痛いって……もう少し、力抑えてくれ。」

つとデイオが叫びながらエミコアがデイオ胸に顔を当てる。

「……心配したのよ」

「え？」

涙声でエミコアがいった。

「10日間も……目が覚めないから……」

つとエミコアがいった。

「10日間……そんなに、眠つてたのか？」

「うん」

Hミコアがディオの胸に顔を当てるため、顔を少しだけ、動かし頷く。

「……心配……かけたな」

つとディオがHミコアを優しく抱き締め返す。

「うう、ばか、ばか、ばか」つと言ったHミコアがまだ強く抱き締めてきめ、泣き始めた。強く抱き締めてきたので、痛い表情をしたディオだったが、ディオもHミコアを優しく抱き締めた。

しばらくして、抱き締めていたHミコアが手を離したので、ディオも手を離した。

「…………」めん。いきなり、抱き付いたりして……痛かった？』

つとHミコアが聞く。

「ああ、少しだけだけど」

つとディオが答えた。

「うめん。本当は、こんなつもりじゃあ、なかつたんだけど、あんたが目を覚ましたから、つい、嬉しくて……」

「そりか・・・・・」

「怪我・・・・・大丈夫?」

「身体はやつと起こせるぐらいだ。まだ立つて歩けないよ」

「ヒーリィオが言つた。

「その怪我を治したのはね、ディオン達なんだ」

「そりか、後でお礼しないと」

「ヒーリィオが言つた

「ね、熱は?」

「ヒーリィアが言つた。

「熱?多分、そんなに高くないと御ひよ。」

「じゃ、じゃあ確認をせん

「構わないけど?」

「ヒーリィアがルークに近づく。そして・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「…………え？ 今で／＼／＼／＼？」

不意に「アーロ」でやられたので少し照れたティオ。

「ね／＼＼＼＼＼、熱はないね／＼＼＼＼＼」

照れながら言つてゐるア。

「そ、そうか／／／」

つとデイオも照れながら言つた。

「う、うめんな。本当に……怪我をしたの?……熱なんかないよね」

「そんな」となこと思ひたがり…………

つとテイオが言つ。

「あ、あたし、帰るね。これ以上、ルークの怪我が悪化しても困るから。」

つとエミリアがティオの部屋を向かおうとした時、不意にエミリアの手が捕まれる。そして・・・引っ張られる。

「アサヒ」

「とエミリアが言つ。エミリアの手を引いたのは、他でもない、ティオだつた。そしてティオがエミリアの胸に顔を当てる。

「ちゅう、ちゅうヒルー・・・・ク?」

つとHミコアがディオをひき離そうとしたが、出来なかつた。何故なら、ディオが泣いていたからだ。

「ルーク・・・・どうしたの?」

つとHミコアが聞く。

「「あん、しばらへ・・・・」」いつわせへ・・・・くれないか?」

「え?」

「少し・・・・だけで・・・・いい・・・・少し・・・・だけ。」

つと涙声でディオが言つ。

これ以上、Hミコアは何も言わなかつた。そしてHミコアはディオがやつたように優しく、抱き締め返し自分の頬をディオの頭にのせた。

しばらくしてディオが寝息を立てたので、Hミコアがゆっくりディオをベッドに寝かせた。寝かせたディオに毛布をかける。そしてディオの目に涙がついていたので、自分の手で涙を優しく拭き取る。そして自分の顔をディオの顔に近づけ、優しくディオの「△」に自分の唇を当てた。そしてHミコアは

「お休み・・・・ルーク。・・・・(好きだよ)」

最後の言葉は、人に聞こえないほどの声で言った。そしてエミリア  
はティオの部屋を静かに出ていった。

## 第三話・絆 1（後書き）

絆つて言つよりも、

「ディオ×ヒミリアのちょいラブの回になつてしましました。果たしてこれが、ちょいラブの回なのか、ちょいラブの回じゃないかは自分じゃあ分かりませんがまあ、ちょいラブ……じゃあないかな？」

「ヒミコア」「あたし達、こんな奴に恥をかかされたんだ……」

「ディオ」「……」

誤字、脱字がありましたら、教えて下さい。

第三話・絆 2(前書き)

第三話・絆 2 です。

では、どうぞ(少なーーー)

～夢

『ディオは、また、夢を見ている。わざわざ遡つ夢。ディオと少女が話をしている。』

『ディオくん』

『だから、【くふ】はやめなさい。年上だぞ』

『じや、何て呼べばいいの？』

『【トライカさん】とか、【ディオ】でいいよ』

『うーん、だつたら【ディオくん】がいいな～』

『恥ずかしいから、やめなさい…』

『あ～あ、照れてる～』

『お前、俺をバカにしてるのか？』

『・・・・・ひひひ、ひひひて樂しく話すの初めてだから・・・・・』

『「」めんな。また、悪い事言つたな。』

『「ひん、ディオくんは悪くない。ディオくんは優しい人だよ』

『え?』

『私達が危ない時に助けてくれたし、私達に生きる希望をくれた。』

『ヒリナ・・・・』

『私、・・・・・ディオくんの事・・・・・大好きだよ。』

『・・・・・』

『・・・・・今まで、ありがとう。』

『ああ、』

『もつ・・・・・時間だね・・・・・』

『ああ、』

『また、会おうね』

『そうだな。元気に暮らせよ。ちやんとよこすでこなごだいぞ』

『私達のなかで、私が一番よこすだよ。』

『よべぬつよ。お前が一番庄屋のやうなよ。』

『ひどい。』

『あはははは、』

『笑わないでよーー。』

『「じめん、「じめん』

『私の将来の夢・・・・・・』

『そりいえば、あの時聞いてないな』

『は、恥ずかしかったんだ／＼／＼／＼』

『ん？』

『わ、私の将来の将来はね。』

『何だ？』

『ディオくんのお嫁さんになる事ーーー。』

（リトルウイング  
ルークのマイルーム）

夢から覚めるディオ。

(いつの間にか、寝てたんだ……。)

そして、夢で見たことを思い出す。

(あいつら……元気にしてるかな? あれから、もう4年になる  
な……。)

そしてディオは、ある少女の事を考えてる。

(ヒリナ……か。ふつ、俺のお嫁さんか。その時は、俺は、お  
っさんに、なってるな。今年で確か……11歳……か。)

そしてディオは、カレンダーを見た。

(あいつらと初めてあつた日は……来週か……。)

つとなど考えてると。

プシュー

「ん?」

「ルーク……大丈夫か?」

(この声は……)

ディオの前に現れたのは、ナギサだった。

「ナギサか」

「ああ、貴方が田を覚ましたってヒリコアが言っていたのでな。様子を見に来たのだ」

「わざわざ、すまないな。」

「や、気にしないでくれ。わ、わたしが自分でやった事だ」

「いや・・・嬉しいんだ。リトルウイングを勝手にとびたした俺をこんなにも、心配してくれるのがさ・・・」

「ルーク・・・」

「ありがとうな、ナギサ」

「れ、礼を言つた。な、何だか、恥ずかしい・・・//」

「や、そつか?」

（数分後）

ナギサは、ティオに申し訳なさそうに

「すまないな、貴方は怪我をしてるはずなのに、長話などしてしまつて」

つと謝った。

だが、ディオは、笑いながら。

「俺は別に気にはしないさ。」

つと言つた。その言葉に、ホッとしたナギサ。

「貴方は、本当に優しいのだな」

「・・・・」

『ディオくんは、優しい人だよ。』

『ルーク？大丈夫か？もう少し休んどいた方がいい。』

つと言つたナギサがディオをベッドに寝かす。

「たくさん、寝たから大丈夫だよ。」

つと言つたディオが起き出そつとする。

「ルーク！！無理をするなーーー。」

つとナギサが言つたとたん、

「うわ、」

つと前に倒れる。

「「え？」「うわ」」

ディオが前に倒れた場所にナギサがいた。ナギサもいきなり倒れたので、一緒に倒れる。

「・・・・／＼／＼／＼

「・・・・／＼／＼／＼

ディオがナギサをおい被さるよつに倒れたので、顔がとても近いところにあつた。

「「い、い、いめん。け、怪我はない／＼／＼？」

つと顔を離し、焦つて聞くディオ。

「わ、わ、わたしは、大丈夫だ。そ、それよりルークの方は？」

ナギサも焦つて聞く。

「お、俺は大丈夫」

「そ、そつか。わ、わたしも大丈夫だ。」

「そ、そつか、よかつた。」

まだディオが焦っている。

「で、では、わたしは、こゝ、これで、帰るぞ。」

ナギサもまだ焦っている。

「あ、ああ、ありがとな」

少し落ち着いたディオがお礼を言つ。

そしてナギサは、ルークの部屋を出た。

「ふう～」

ディオがゆっくつと、ベッドに上がる。そんなに高くはないので、樂にのぼれる。

ベッドに入ったディオは、ある事を思い出した。

『この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆だ』

(絆・・・・か。リトルウイングを勝手にとびたしたこの俺に、皆は力を貸してくれるか。)

つと疑問をしていると、訪問者が、一人、また一人とやって來た。

## 第三話・絆 2（後書き）

「ディオ×ナギサの話でした。」

絆って、いま考えて見ると2011年の漢字一字ですね。やはり、絆は大切にしないとですね。

ナギサ「それより、今回の話しに絆は関係あるのか？」

まだ、最初なんで、大きな発展はないです。絆って言つのは・・・

ディオ「誤字、脱字があつたら、このバカ作者に教えてあげてくれ」

## 第三話・絆 ③(福井先生)

結つて今考えると難しき言葉ですよね。多分にんな感じかと……。

～3日後・ルークのマイルーム

「はあ～」

ディオは、ため息をついた。その訳は、

「シュー

「よお、気分はどうだ？」

入って来たのは、クラウチだった。

「テレビ局やガーディアンズ。そして、HIIコア達に時間の見方を  
教えてやってくれないか？これじゃ治る怪我も治らなこ・・・」

「それは自分で教える。」

「じゃ、あなたにも教えないとな。もつ疲れたんだ。また、今度に  
してくれ」

「それだけ喋れるんじゃ元気になつたな。」

「おかげでまでな」

ディオは、起き上がりベッドの上に座つてゐる。

「あんたが、ここに来るなんて、珍しいな。」

「おめでたそひよつと頼みたい事があるんだ

「依頼を受けろつか?」

「怪我をしてるやつに、依頼を受けろって言わねえよ。」

「じゃ、何だ?」

「これだ。」

つとクラウチが一つの箱を出す。

「何だ?これ?」

クラウチに渡された箱を受け取る。

「開けてみろ・・・」

「・・・爆弾じゃ、ないだろ?」

「んなわけ、あるか!?!」

つとクラウチが言つ。

ディオは、言われた通り、箱を開ける。すると、

「何だ?これ?」

それは一つの巾着だった。

「」「一つを届けて欲しい依頼があつたんだよ。」

「依頼を受けろって言わねえよ、つとかいつておきなが、俺に頼んでるじやねえか？それに依頼を受けるにしろ、頼む場所間違ってるだろ。」

「最初は、断ろうとしたが、おめえさんを思い出しちゃな。」

「俺？」

「届け先は、パルムのカリス都市。パルムの大都市からはそんな遠くない。歩いて10分ぐらいの場所だ」

「だから、何で、俺なんだ？」

「歩くリハビリに丁度いいだろ？」

「おいおい、リハビリでこの依頼を受けたのか？まあ、確かに届け物なら、歩くリハビリにちょうどいいかも知れないが・・・じゃなくて、依頼にリハビリってないだろ。それに俺1人か？」

「安心しろ。エミコアもついていくように言つておいた。」

「だったら、エミコアだけで・・・」

「じゃ、頼んだぜ」

「と言つたクラウチがルークのマイルームを出た。

「はあ～」

つとため息を出す。

「ま、確かにリハビリをかねて行くか。」

「ディオは、ゆづくつと、ベッドから降り、ゆづくつとへやをでてマ  
イシップに向かった。」

「あ、きたきた」

「「」みんな、H//コア。待ったか？」

「「」ひひん、今来た所だよ」

そう言つたH//コアは、ディオのために椅子を用意した。

「あ、悪いな」

つと用意された椅子に座つた。

「お父さんも、ひどいよね。ルークにこんな仕事をさせるなんて

「まあ、いいじゃないか？クラウチはクラウチなりに考へてくれた  
と思えば（そういえば、俺の本名書つてなかつたな）」

つと考へてながら、ディオは言った。

「嫌な時は、嫌だつて言つた方がいいよ。」

「・・・・・」

（そういえば、良い思い出をつくるために、いやな仕事でも引き受けたつけ・・・）

「ルーク？」

（クラウチの借金を取りに行つたり、亜空間事件後も面倒な事件も受けたな）

「ルーク！！」

「！！」

ディオが、ヒミリアの声にはつゝとする。

「本当に大丈夫？やつぱり休んでた方が」

つとヒミリアが言つ。

「大丈夫だよ。ヒミリア、船を出してくれるか？」

つとヒミリアに言つ。

「うん、分かった。でも無理しないでね。」

「ああ、分かった。」

「パルム・カリス都市」

「わざわざすいません。」

つと女性が頭を下げる。

「いえ、気にしないでください。」

HIIコアが女性に言ひ。

「すいません。もう、お母さんたら、宅配便で送ればいいのに」

つと女性は言った。

「近くで仕事があったので、失礼かも知れないです、ついでに、つて事で持つて来たんですね」

つとティオが言った。

「失礼なんて、とんでもない。こちらが仕事の邪魔をしてすいません。あの～おいくらですか？」

女性が財布を出しながら言った。

「お金なんて要らないですよ。」

「とH//コアが首を振る。

「でも、母が迷惑をかけて、せっかく、持つて来てくださいたんですから」

「このよつな事でお金をもらつたら、上の人に怒られるんで

「じゃ、これはほんの気持つです。しかりだけでも受け取つてください。」

「いえ、ですから……」

H//コアがもう一度断りつとしだが、

「すいません。 いただきまーす」

「どうだ、オガ頭を下げ、女性が持っていた箱を受け取る。

「あつがとうござまわ」

「いえ、じゃ俺達はこれで

「と女性の家を後にくる。

「あんた、何で、それいただいたの？」

H//コアが怒りながら叫ぶ。

「断つても返つて失礼な事もあるからな。それには……」

「それには？」

「何でもない。さあ、帰る。」

「えつとうじょと氣になるんですけど。」

「何が？」

「やつやの、それに、よ。どうこうの意味なの？」

つとH//コアが迫る。

「やつのうち話すよ。今日は、もう良いだら？」

「……分かった」

H//コアがしぶしぶ頷いた。

だが、

「……」

いきなりティオが膝をつく。

「ルーク！！大丈夫！！」

「ああ、やつぱり、無理があつたかな。」

「い、今、病院に連れていくね！！」

しかし、近くに船がないので、

「すいません！..誰かいませんか？」

つとHミコアが叫ぶ。

その声でHミリアの元に駆けつける一般人の方々。  
「どうしました？」

「何がありました？」

「え？ 何々？」

「すいません。誰か救急船（救急車みたいなもの）を呼んでください。連れが大変なんです。」

「わかりました」

「ありがとうございます」

つとHミコアが頭を深々と下げる。

「もしもし、パルム病院ですか？怪我人がいるんです。場所は・・・

・

つと一般人の方が電話をする。

「ルーク。もう大丈夫だよ」

エミリアがディオの肩に手をやる。

「そつか、ありがとう」

「あたしより、皆さんに感謝しないと。」

「そうだな・・・」

(絆・・・か。失わす訳にはいかない。何としても、守らない  
と)

その光景を見ていたソロが

「兄貴、大変だ。ディオの兄貴が病院にいくぞ。」

『なんだって？何処の病院だい？』

「パルム病院だ。」

『くつ、一番防犯の高い病院か。』

「どうする？兄貴」

『ソロ。とりあえず帰つて来て。作戦会議だよ』

「分かった。」

つと通信を切つたソロがその場を去つた。

## 第三話・絆 3(後書き)

絆ねえ）。・・・難しい・・・。でも、頑張つて書きます。

誤字、脱字がありました教えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

---

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2012年1月5日19時45分発行